# mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

2
［ムンディ］ No. 89
February 2021

特集 内陸アジア

# 彩り際立つフロンティア

# mundi

February 2021 No. 89

編集・発行：独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency : JICA
制作協力：株式会社 木楽舎

『mundi』（ムンディ）はラテン語で“世界”。本誌は、開発途上国の現状や、現場で活躍する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。


## Contents


02 目次
プロローグ Vol. 28

04 特集 内陸アジア
彩り際立つフロンティア

08 出稼ぎではなく、自らビジネスを立ち上げる タジキスタン
10 ふたたび種子の生産地へ キルギス
12 異国で咲いた友情の花 アゼルバイジャン
14 発展とともに税制も近代化へ モンゴル
16 日本での留学経験から教育改革を推進 ウズベキスタン
18 お皿を変えて、健康的なおもてなしを タジキスタン
20 日本のブランドとともに 世界品質のもの作りへ キルギス
22 遠くて近い国々の魅力
JICAスタッフが語る内陸アジア

24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 27
キルギス

26 世界につながる教室⑭
授業でSDGsを学ぶ

28 地球ギャラリー Vol.149 ラオス人民民主共和国
写真・文●堀内 孝（写真家）
戦禍の記憶と多様な文化

34 教えて！ 外務省
知っておきたい国際協力㉙

36 JICAイベントカレンダー

38 読者の声、プレゼントほか

39 JICA PRESS

40 わたしが見つけたSDGs Vol.29


＊掲載されている情報等は取材当時のものです。

**【お詫びと訂正】**

本誌2021年1月号において以下の誤りがありました。
訂正いたします。

2ページ
誤：横浜県横浜市
正：神奈川県横浜市

読者のみなさま、ならびに関係者各位にご迷惑をおかけしたことを謹んでお詫び申し上げます。

JICA ジャイカ
信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

日本との交流が増えている内陸アジアの国々。文化や言語が多様性に富み、親日家も多い。



プロローグ Vol. 28

# ウズベキスタンの人とサッカー

文●柴村直弥

真っ白な街並み――2012年1月某日。タシケント国際空港からチームバスでホテルに向かう際に窓から見た景色だ。初めて見たウズベキスタンが今もまぶたに焼き付いている。FCパフタコール・タシケントに所属するための渡航だった。同チームはウズベキスタン国内で最も優勝回数が多くACL*の常連でもあり、アジアのサッカー強豪クラブである。

当初は雪に包まれていたタシケントも、春が近づくにつれて、徐々にその美しい姿を見せてきた。滞在していたウズベキスタンホテルの目の前には英雄アムールティムール像がそびえ立ち、日本人が中心となって建設したナボイ劇場や、神秘的なモスクもいくつもある。

ウズベキスタンで初めて一人で乗ったタクシーで、運転手さんからこう言われた――「FCパフタコールのシバムラだろ？　応援しているから頑張って」。降りる際に料金を払おうとすると、かたくなに拒み、「今日はいいよ。頑張ってな！」とタクシー代を無料にしてくれた。

街に出ればいたるところで現地の方々に声をかけていただき、好意的に応援してくれた。試合に負けた翌日は、乗ったタクシーの運転手さんに叱咤激励されたこともあったが、それも応援してくれているからこそ。

ウズベキスタンリーグでプレーする初めての日本人選手ということもあり、少なからず責任とプレッシャーも感じていたが、街の人々の温かい応援が力になった。日本大使館やJICA職員、青年海外協力隊など、試合には多くの在留邦人の方々も応援に来てくれたほか、日本からブハラまで応援に駆けつけてくれたサポーターもいた。2年間プレーしてポーランドのクラブへ移籍する際には、いくつかのクラブから「また日本人選手を紹介してほしい」と言われ、次の二人目の日本人選手（佐藤 穣選手）につなぐことができたのは、現地のウズベキスタンの人や在留邦人の方々の応援とサポートのおかげである。

先人の日本人が建設したナボイ劇場が1966年の地震の際に多くのウズベキスタン人の命を救ったという。そうした歴史も、現地の方々が日本人に対して好意的である要因だろう。そして、私もその恩恵を受けた。

チームメイトのウズベキスタン人選手は、日本語を学び、私に「コンニチハ、ゲンキデスカ？」「アリガトウ」などと話しかけてくることも頻繁にあった。パフタコールでチームメイトだったウズベキスタン代表GKのティムール・ジュラエフは、私のことを「キョウダイ」と呼んで仲良くしてくれた。

2年間現地に住んで仕事やプライベートをともにしてきた私のウズベキスタン人に対する印象は、温和で思いやりがあるということだ。日本人に比べればルーズな部分もあるが、根は優しい。

他の国のチームへ移籍してからも2度ほどウズベキスタンに行った。当時住んでいたホテルのスタッフは私のことを覚えていてサービスしてくれ、現地の友人知人も歓迎してくれた。

ウズベキスタンは今後も訪れたい国であるし、2年の間に現地に遊びに来てくれた家族や友人知人も、みんなまた来たいと言ってくれていた。

2015年に広島で行われた平和祈念国際ユースサッカー大会へウズベキスタンU-17（17歳以下）代表チームを招き、19年にはヴァンフォーレ甲府U-16がウズベキスタンへ遠征する際もサポートさせていただいた。今後も両国の懸け橋となることを行い、日本とウズベキスタンに少しでも恩返ししていければと思う。

＊AFC Champions Leagueの略称。アジアNO.1のクラブを決める権威ある大会のこと。

イラスト●中村知史


柴村直弥（しばむら・なおや）
1982年、広島市生まれ。広島県立広島皆実高校2年時に全国高校総体で優勝。中央大学では中村憲剛らとプレーし、アビスパ福岡でJリーグデビュー。徳島ヴォルティスでは主将を務め、2011年にラトビアのFKヴェンツピルスに移籍。ラトビア1部リーグとラトビアカップで優勝し、国内2冠を達成する。ウズベキスタンのパフタコールではACLにも出場し、次いでポーランドでもプレーした後、当時J1のヴァンフォーレ甲府に移籍。現在はSHIBUYA CITY FCでプレーしつつ、DAZNのJリーグ解説、執筆、講演活動など多岐にわたって活動している。

特集 内陸アジア

# 彩り際立つフロンティア

世界地図を日本から西に目を向けると、そこには広大なユーラシア大陸が広がる。世界の陸地面積のほぼ4割弱を占めるこの大陸の内陸部には若い国々が多い。異国情緒にあふれ多様な内陸アジアのこれらの国は、今後の発展が期待されるフロンティア（新天地）として注目を集めている。

文●松井 健太郎

## 社会主義から資本主義へ 独立後から現在も移行中

日本は海に囲まれた島国だが、世界には内陸に位置する国も多く存在する。東アジアのモンゴルと、1991年にソビエト連邦（以下、ソ連）が崩壊したときに独立を果たした中央アジア・コーカサス地域の8か国がそうだ。これらの内陸アジアの国々は、ソ連の社会主義から離れ資本主義の国へと移行を進めている。ただ、この移行はそう簡単なことではないようだ。

「たとえば銀行ですが」――と話すのはJICA東・中央アジア部次長の田邉秀樹さんだ。

「私たちは、銀行は預金を集め、企業や個人に貸し出し、利息を得て収益を上げることが仕事だと知っています。ですが、ソ連時代の中央計画経済のもとでは銀行は預金を集めず、モスクワの中央銀行から地方の農業銀行などにお金を届け、農場などに分配することが仕事。民間企業のように利潤を得て発展していこうという考え方はありませんでした。それはいわば国民全員が公務員だったからです」

このように銀行ひとつとってもそのあり方はまったく異なるのだ。そこで日本は、独立した国々の要望に応え、民間企業によるビジネスを通じて品物やサービスの売り買いが自由に行われる市場経済に移行できるような後押しを長年担ってきた。

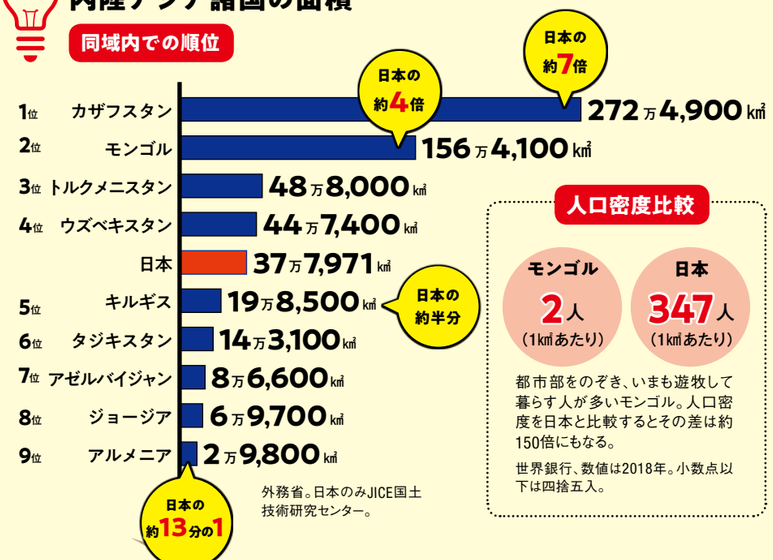
生活習慣や文化を見てみよう。モンゴルといえば、広大な草原を馬に乗って駆け回る遊牧民を思い浮かべるが、中央アジアのカザフスタン、キルギス、トルクメニスタンの人々もまた遊牧民として暮らしていた。山羊や羊を飼って乳を飲み、肉やその加工品を食べ、毛皮から衣服や住居をつくるという暮らしが代々続いていた。しかしソ連時代に、定住して農業を行うことを強いられる。「今や中央アジアに完全な遊牧民はいません。ふだんは都市住民や農耕民の生活を送りつつ、夏に遊牧的な休暇を過ごすというスタイルを楽しんでいるようです」。

また、中央アジア5か国はすべてイスラム教の国々だが、その信仰はソ連時代の72年間、ほぼ3代にわたって禁じられていた。「その時代に育った年配の世代には、お酒を飲んだりする人や、断食をしない人もたくさんいます。しかし、独立後30年がたつ間に先祖の信仰が復活し、イスラム教に純粋な関心を寄せる若者が増えた結果、そんな年配者が自分の子どもからたしなめられる場面も見られます」と、田邉さんは中央アジアの今の姿を語った。

日本より大きい？ 小さい？

## 内陸アジア諸国の面積

同域内での順位




外務省。日本のみJICE国土技術研究センター。

### 人口密度比較

| モンゴル | 日本 |
|---|---|
| 2人（1㎢あたり） | 347人（1㎢あたり） |

都市部をのぞき、いまも遊牧して暮らす人が多いモンゴル。人口密度を日本と比較するとその差は約150倍にもなる。

世界銀行、数値は2018年。小数点以下は四捨五入。

【p.04～07の国データ】
●人口、おもな言語、おもな宗教：外務省。
●一人当たりGNI（国民総所得）：世界銀行、数値は2019年（トルクメニスタンは2018年）。
●おもな産業：JICA

1

東アジア

## モンゴル

Mongolia

【モンゴル国】
- 人口：329万6,866人
- 一人当たりGNI：3,790ドル
- おもな言語：モンゴル語、カザフ語
- おもな宗教：チベット仏教等
- おもな産業：資源（銅・石炭）、農牧業

©Maykova Galina/Shutterstock.com
モンゴル帝国を建国したチンギス・ハーンは今も同国の英雄だ。

### 氷点下が生む、熱い絆！

かつて地球上の陸地の約4分の1を領土として栄えたモンゴル帝国（1206～1634年）の流れをくむ。現在の首都ウランバートルは、冬はマイナス30度を下回るほどの酷寒の地域で、そのため日本の中でも北海道の自治体や企業が持つ寒冷地技術に対する需要が高い。都市開発や住宅、建設、農業など、寒冷地技術の分野で経済交流が盛んになっている。

## 親日派が多いのは戦争とアニメの影響から

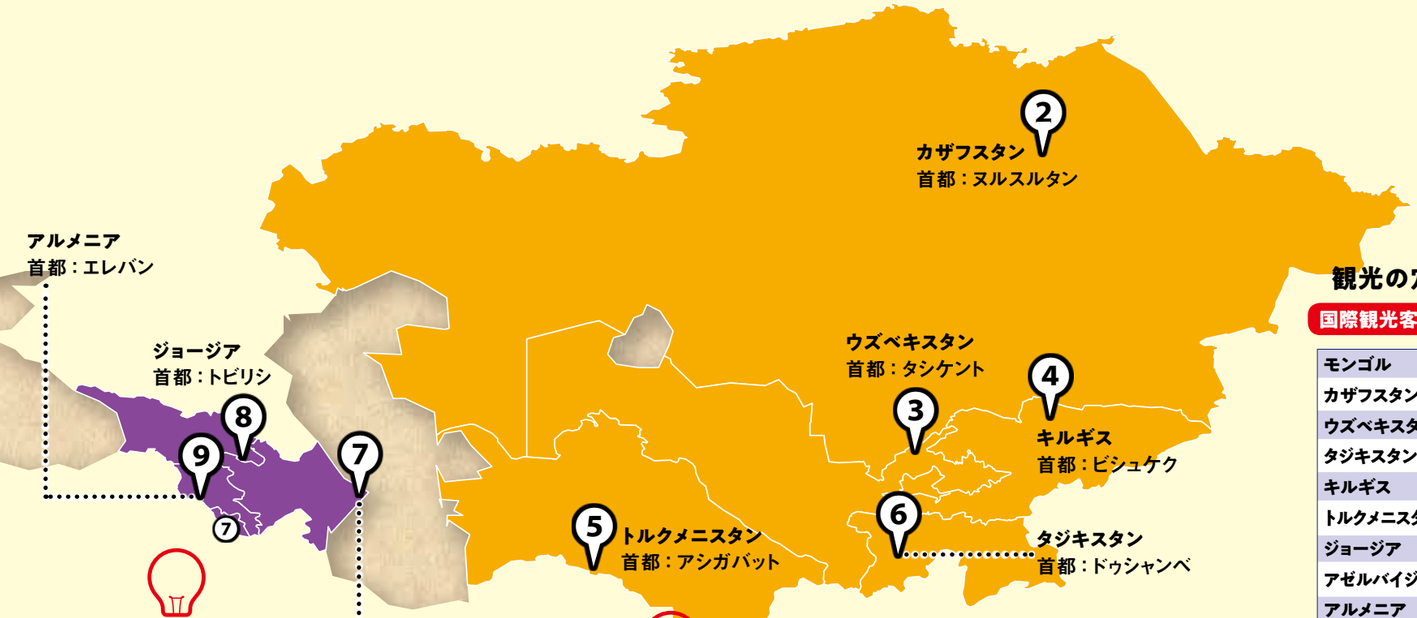
内陸アジアには親日派の人が多い。理由を探ると第2次世界大戦にたどり着く。敗戦後、ソ連の捕虜となった日本兵は中央アジアに移送され、強制労働に従事した。ウズベキスタンでは首都タシケントのナボイ劇場を彼ら抑留された日本人たちが建設したが、その働きぶりは街の人たちが目を見張るものだったという。毎日規則正しく、懸命に働くその姿に感動すら覚えたタシケントの人々は日本人と親しくなり、ときには食べ物を差し入れ、そのお礼に日本人は乳母車を手作りするなど温かい交流が生まれた。日本に帰国できずに現地で亡くなった捕虜の墓を立てて守る人も現れた。

そのタシケントで1966年に大地震が発生。街が壊滅状態になる中、ナボイ劇場だけはびくともしなかったことも日本人を称える逸話として語り継がれている。

親日国が多い理由はもう一つある。内陸アジアは周囲の大国から少なからず影響を受け、自国を守ってきた歴史があるが、中立的な立場であった日本に対しては好意的な感情を抱いているという。そんな日本に期待されるのは、内陸アジアに関わる大国間のバランスを取る役割で、日本も経済やビジネスの協力や文化的な交流を深めることで、その役割を担おうとしている。

独立以前からすでに日本の電化製品が人気を呼び、現在は漫画やアニメなどクールジャパンの効果で日本語の学習熱も盛んになり、日本に旅行や留学をしたいと望む若者が増えている。

ヨーロッパとアジアの懸け橋の位置にある中央アジアやコーカサス地域は、異国情緒あふれる街並みや文化が独特の雰囲気を醸し、この地域ならではの旅情を味わわせてくれる。「この地域に暮らす日本人はまだ多くはないものの、現地の人はとてもフレンドリーで一度訪れればぜひまた行きたいと思う国ばかりです」と田邉さんは話す。観て楽しい、食べて楽しい、ふれて楽しい内陸アジアに、私たちももっと目を向けてみよう。




## 「スタン」の意味は？

中央アジアの国名につく「スタン」は、ペルシャ語に由来し「~の土地」という意味をもつ。たとえば、ウズベキスタンならウズベク民族の土地、タジキスタンならタジク民族の土地ということを表している。キルギスもかつての国名はキルギスタンで、1993年に現国名に改名した。

## 現地の行政官には日本通も多い

**人材育成奨学計画（JDS）の受け入れ実績（2000～19年度）**

ウズベキスタン **345** 名　キルギス **210** 名　タジキスタン **62** 名

JICAは、各国で将来指導者層となることが期待される若手行政官等に日本の大学で学んでもらう取り組みを実施している（人材育成推奨計画：略称JDS）。2000年の第1期生は、ウズベキスタンからの20名で、それ以来キルギスやタジキスタンからも留学生が訪れている。日本をよく知る人たちが国の中枢で活躍し、そのなかからキルギスの元法務大臣やタジキスタンの現労働大臣など閣僚も誕生しており、日本とよりよい関係が築かれようとしている。

## 観光の穴場的スポット

日本は3,000万人超

**国際観光客到着数（2018年）**

| | |
|---|---|
| モンゴル | 52万9,000人 |
| カザフスタン | 878万9,000人 |
| ウズベキスタン | 534万6,000人 |
| タジキスタン | 103万5,000人 |
| キルギス | 42万3,000人 |
| トルクメニスタン | — |
| ジョージア | 475万7,000人 |
| アゼルバイジャン | 263万3,000人 |
| アルメニア | 165万2,000人 |

世界銀行、数値は2018年。トルクメニスタンは2007年の時点で8,200人。

知る人ぞ知る国を旅したい――そういう人にぴったりなのが内陸アジア。各国が経済発展を続ける一方で、ウズベキスタンやジョージアのように多くの観光資源が豊富な国もあり、日本からの観光客の来訪にも期待が高まっている。

## 8 ジョージア

コーカサス
**Georgia**

【ジョージア】
- **人口**：390万人
- **一人当たりGNI**：4,780ドル
- **おもな言語**：公用語はジョージア語
- **おもな宗教**：キリスト教（ジョージア正教）
- **おもな産業**：農業、食品加工、観光

©Carrot Spy/Shutterstock.com
シュクメルリ。日本国内の牛丼チェーンでも期間限定で提供されるなど話題になった。

### 歴史あるワイン発祥の地

数年前まで日本ではロシア語読みでグルジアと呼ばれていたが、今は英語読みでジョージア。栽培されるブドウの品種は500以上。「ワイン発祥の地」といわれるジョージアワインの歴史は約8,000年前にさかのぼる。鶏肉をニンニクとクリームで煮込んだ伝統料理シュクメルリとともにワインを堪能したい。ロシアから観光に訪れる人も多く、観光業がGDPの約5分の1を占める観光立国でもある。

## 7 アゼルバイジャン

コーカサス
**Republic of Azerbaijan**

【アゼルバイジャン共和国】
- **人口**：1,000万人
- **一人当たりGNI**：4,480ドル
- **おもな言語**：公用語はアゼルバイジャン語
- **おもな宗教**：イスラム教シーア派
- **おもな産業**：資源（石油・天然ガス）

バクーに建つ炎をモチーフにした高層建築のフレイムタワー。夜はライトアップされ街を彩る。

### かつて世界最大だったバクー油田

中東に油田が発見される前、1910年ごろのバクー油田は世界の90パーセントの産出量を誇り、世界で初めて石油産業が成立した国といわれている。カスピ海沖の油田をはじめ、豊富な石油資源があったことでソ連からの独立後もスムーズに市場経済に移行でき、2000年代には急激な経済発展から「第二のドバイ」ともいわれた。首都のバクーにはイスラム建築とモダンな現代建築が共存している。

## 9 アルメニア

コーカサス
**Republic of Armenia**

【アルメニア共和国】
- **人口**：290万人
- **一人当たりGNI**：4,680ドル
- **おもな言語**：公用語はアルメニア語
- **おもな宗教**：キリスト教（東方諸教会系のアルメニア教会）
- **おもな産業**：農業、宝石加工

©Sagittarius Production/Shutterstock.com
世界最古といわれるエチミアジン大聖堂。ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。

### ノアの方舟が漂着したとされる国

世界最古のキリスト教国。旧約聖書に記されている「ノアの方舟（はこぶね）」の物語では、神の指示に従ってノアが木で方舟を造り、家族と世界中の動物のつがいを乗せて大洪水の中を漂流するが、その方舟が流れ着いたのが古代アルメニア地域にあるアララト山とされている。1998年のスピタク地震の際に日本は国際緊急援助隊を派遣し、それ以来、防災分野の協力も続いている。

## 6 タジキスタン

中央アジア
**Republic of Tajikistan**

【タジキスタン共和国】
- **人口**：930万人
- **一人当たりGNI**：1,030ドル
- **おもな言語**：公用語はタジク語、ロシア語も広く通用
- **おもな宗教**：イスラム教スンニ派
- **おもな産業**：農業、アルミニウム、水力発電、出稼ぎ

©Maximum Exposure PR/Shutterstock.com
パミール高原はタジキスタン、キルギス、中国、アフガニスタンなどにまたがる。

### 「世界の屋根」を望む山岳国

総面積の9割以上が高地で、4割以上の面積に「世界の屋根」と呼ばれるパミール高原が広がる世界一の山岳国。5,000メートル級の山々が連なり豊かな自然に恵まれている。ソ連からの独立後1992年から97年まで内戦が続き、内陸アジアの中では経済発展に最も遅れてしまった。ソ連時代から綿花の栽培と豊富な水力資源を生かしたアルミニウム産業が盛ん。

## 5 トルクメニスタン

中央アジア
**Turkmenistan**

【トルクメニスタン】
- **人口**：590万人
- **一人当たりGNI**：6,740ドル
- **おもな言語**：公用語はトルクメン語、ロシア語も広く通用
- **おもな宗教**：イスラム教スンニ派
- **おもな産業**：資源（石油・天然ガス）、農業、牧畜

砂漠の大地に巨大な穴が空き天然ガスが燃え続ける「地獄の門」。

### 名馬アハルテケを生んだ国

アハルテケは約3,000年前に飼育され始めたトルクメニスタン原産の馬の品種で、現存する最古の馬種の一つと考えられている。今は世界で3,500頭ほどしか飼育されていない貴重な馬で、「黄金の馬」と呼ばれるように光沢のある美しい毛をなびかせて走る。勇敢な立ち姿はトルクメニスタンの国章にもデザインされている。国土の大部分が砂漠で、天然ガスの埋蔵量は世界の約1割を占める。

## 3 ウズベキスタン

中央アジア
**Republic of Uzbekistan**

【ウズベキスタン共和国】
- **人口**：3,280万人
- **一人当たりGNI**：1,800ドル
- **おもな言語**：国家語はウズベク語、ロシア語も広く通用
- **おもな宗教**：イスラム教スンニ派
- **おもな産業**：農業、資源（石油・天然ガス）、出稼ぎ

「青の都」とも呼ばれるサマルカンド。街にはイスラム建築が並ぶ。
©Alexandru Nika/Shutterstock.com

### サマルカンドブルーに魅了される

シルクロードの要衝として栄えた都市、サマルカンド。サマルは“人々が出会う”、カンドは“町”を意味するように、世界中の交易商人が行き交った。青を基調としたタイル張りの建物は「サマルカンドブルー」と呼ばれ、観光客の目を奪う。前田敦子主演の映画『旅のおわり世界のはじまり』のロケ地となった。

## 4 キルギス

中央アジア
**Kyrgyz Republic**

【キルギス共和国】
- **人口**：620万人
- **一人当たりGNI**：1,240ドル
- **おもな言語**：国語はキルギス語、公用語はロシア語
- **おもな宗教**：イスラム教スンニ派
- **おもな産業**：牧業、資源（金）、出稼ぎ

「中央アジアの真珠」と称されるイシククル湖。琵琶湖の9倍の大きさを誇る。
©Thiago B Trevisan/Shutterstock.com

### 神秘漂う中央アジアのスイス

キルギス人と日本人は顔がそっくりで、大昔は兄弟であったという伝説が同国にあるほどだ。日本語や日本のアニメの人気も高い親日国。三蔵法師も越えたとされる天山山脈、透明度の高いイシククル湖等の圧倒的な自然、春にはチューリップ、夏にはエーデルワイスの咲く風景が見られることから「中央アジアのスイス」とも呼ばれる。遊牧文化の詰まった羊毛フェルトグッズはお土産にぴったり（p.20）。

## 2 カザフスタン

中央アジア
**Republic of Kazakhstan**

【カザフスタン共和国】
- **人口**：1,860万人
- **一人当たりGNI**：8,820ドル
- **おもな言語**：国語がカザフ語、公用語はロシア語
- **おもな宗教**：イスラム教、ロシア正教
- **おもな産業**：資源（石油・天然ガス）、農業、冶金・金属加工

大草原の中に東京23区ほどの広さの街が広がるヌルスルタン。

### 黒川紀章さんが設計した首都

1997年に遷都したカザフスタンの新首都の都市設計は、建築家の故・黒川紀章さんが担った。JICAの協力によるマスタープラン（基本設計）に沿って首都建設が進められ、アスタナからヌルスルタンにと改名した首都には未来都市のような風景が広がっている。また、カザフスタンの企業がサポートする自転車ロードレースチームは世界屈指の強豪で、2012年のロンドン五輪では同国の選手が金メダルを獲得している。

タジキスタン

# 出稼ぎではなく、自らビジネスを立ち上げる

タジキスタンでは他国の出稼ぎ先からの送金が経済の柱の一つになっている。
自国で生活ができるようにするため、
起業支援のプロジェクトに奔走する人々を紹介する。

**Key Person**

**A JICAタジキスタン事務所 企画調査員**
**阿部直美**(あべ・なおみ)さん

2000年代から中央アジアでの支援事業経験が豊富。18年から現職。「人を育てる」という今回のプロジェクトにやりがいを感じている。

**Key Person**

**B アイエムジー スタッフ**
**ウメド・カシモフ**さん

関係者が口を揃えて言うのが「(コロナ禍下にあっても)ウメドさんがいるからプロジェクトが進められている」。プロジェクトの現地での推進役。

**C 同 スタッフ**
**フルシェッド・アザモフ**さん

2012年からJICAの短期プロジェクトなどに関わってきた。日本の文化が好きで、日本人にもタジキスタンを知ってもらいたいと考えている。

## 働き者が多い国

タジキスタン人の印象を問われると、JICAタジキスタン事務所企画調査員の阿部直美さんは「とにかく働き者です。朝5時台のバスでも、仕事に出かける人が多く乗っています」と答える。また約930万人の人口のうち、約7割が30歳以下という若い世代が中心の国であることから「これからの発展に向けたタジキスタンの強みは、〝人〟だと思います」と言い添える。

タジキスタンは石油や天然ガスといった資源に恵まれず、主要な産業は綿花栽培やアルミニウム生産で、中央アジアの国の中では最低レベルの経済水準となっている。若年層の就職先が少なくロシアなどへの出稼ぎが常態化し、その出稼ぎ先からの送金がGDP(国内総生産)の約3分の1を占めているという状況だ。

そんな背景のもと、タジキスタン政府は中小企業の振興と起業家育成を国家の最重要課題の一つとしている。

JICAは、タジキスタン政府が進める起業家育成のための「ビジネス・インキュベータ」運営をサポートする「ビジネス・インキュベーション・プロジェクト」を、2020年3月からスタートさせた。

## コロナ禍に対応し、新たな支援の仕組みも

「ただ、新型コロナウイルス感染症の影響でプロジェクトの開始後、まだタジキスタンへ行けていません」と話すのは、プロジェクトの実施を委託された開発コンサルティング会社のアイエムジー代表・森真一さんだ。しかし、そんななかでもオンラインの会議を活用して現地のスタッフと協議を重ね、起業家育成のためのトレーナー(指導者)を育成するプログラムと、起業志望者に「ビジネスの基礎」を教えるプログラムを練り上げていった。そして20年12月に現地のスタッフが地方都市のホジャンドで、それらのプログラムを試験的に3日間の日程で行った。

また新型コロナの影響で、出稼ぎ先で職を失って帰国した人が自分でビジネスを始められるように、500ドル(約5万円)相当までの資材や機材を支給(もしくは貸与)する仕組みを新たにプロジェクトに加えた。「ビジネスの基礎」を受講後にビジネスプランを立ててもらい、プランの実行のために必要な資材や機材があれば、それを支給するという流れだ。

「資材などの支給は400件分の予算を確保しています。ただ、その実行のためにはこちらも審査体制の構築など、膨大な作業が発生します。プロジェクトが進められるのは、週末も関係なく熱意を持って動いてくれるタジキスタン人の現地スタッフがいるおかげです。オンラインで常にミーティングを行って手順を詰め、現地でしか行えないことはスタッフに任せるかたちで事業を進めています」と話す。

そのスタッフの一人がウメド・カシモフさんだ。もともとJICAタジキスタン事務所で勤務していたが、それを辞め、アイエムジーの現地スタッフとしてプロジェクトに専念することを決めた。「起業家を育成することがタジキスタンにとっていかに大切なことか、そしてその難しさも理解しています。だからこそチャレンジしようと考えたのです」とウメドさんは決意を語る。

フルシェッド・アザモフさんもスタッフの一人だ。将来は自身もコンサルタント業での起業を考えている。「タジキスタンの農産物を日本に紹介するなど、両国の橋渡しをしていきたいです」と展望を語る。

12月の試験的なプログラム運用は、ウメドさんとフルシェッドさんが中心となって行った。「英語の教員資格を持っていながらも、タジキスタンの学校の給料が低いためロシアへ出稼ぎに行き、美容師になった女性も受講生にはいました。コロナ禍の影響で勤務先の美容院が閉まり、戻ってきました。出身の地元で美容院を開きたいそうです。500ドル相当の機材支給を受けられると、開業も可能になります」とウメドさん。熱意の連鎖で、起業を後押しする仕組みが生まれ始めている。

首都のドゥシャンベ。新しいホテルやショッピングモールも増え、活気がある。

タジキスタンの豊かな農産物。農業開発もビジネスチャンスの一つだ。

パミール高原を抱えるタジキスタン。美しい山岳風景が広がる。

地方の子どもたち。若年層が人口の大半を占める"若い"国だ。

街を歩く女性たち。地方では女性の社会進出が進んでいないという問題もある。

コロナ禍下にあっても
現地との連携で
事業を進めています

**Key Person**

**アイエムジー 代表取締役社長**
**森 真一**(もり・しんいち)さん

JICA勤務を経て、1996年にアイエムジーを設立。アフリカやアジアなどの途上国で開発コンサルティングを手掛ける。現地スタッフの能力を引き出すことを"強み"に変え、事業を推進する。

## 「ビジネスの基礎」講座を開催!

2020年12月にホジャンドで試験的に開催した「ビジネスの基礎」講座。ロシアの出稼ぎから戻ったという受講生が3人いた。

「ビジネスの基礎」を受講したファルゾナさん。ロシアへの出稼ぎで培ったヘアメイクのスキルを生かし、地元で美容室を開きたいという目標を持つ。

「ホジャンド・ビジネス・インキュベータ」のディレクターであるディルショッド・ホルマトフさん。講座の内容を高く評価した。

キルギス

# ふたたび種子の生産地へ

かつてキルギスは良質な種子の産地として知られていた。
しかし今、その技術は途絶えている。
そんななか、JICAが協力した新たな種子ビジネスが始まっている。

種子の品質を判断するポイントを学ぶ研修。トレーナーを目指す農家が参加した。

畑や牧草地が広がるキルギスの風景。

**Key Person**

JICA専門家
**白井雅宏**(しらい・まさひろ)さん

愛知県生まれ。Uターンで就農後、JICA青年海外協力隊員として2003年から05年までチリに、10年から12年までキルギスに赴任。「輸出のための野菜種子生産振興プロジェクト」では、16年から20年まで専門家としてキルギスで活動した。

## 世界の状況を知り意識が変わる

天山(てんざん)山脈からの豊富な雪解け水があり、年間を通して日照時間が長く、土壌が豊かなキルギス。農業が主要な産業で、旧ソ連時代に整備された灌漑施設がいまも活用されている。ソ連時代は種子の一大産地で、「キルギスの種」は良質な種子のブランドだった。しかし、ソ連崩壊後は種子生産の技術が途絶えてしまった。そんな種子生産を再興するJICAのプロジェクトに2016年から20年まで専門家として参加したのが白井雅宏さんだ。

白井さんとキルギスとの出合いは11年前までさかのぼる。愛知県で農業に取り組んでいた白井さんは、その経験を途上国で生かすためにJICA青年海外協力隊員としてキルギスへ。「帰国後に同国でのプロジェクトを知り、協力隊とは違う新しい形で自分の力を役立てたいと考えました」。

今回のプロジェクトが目指すのは、肥沃な国土を生かしたビジネスとして種子生産を軌道に乗せることだ。そのためには、種苗会社が求める純度や発芽率など厳格な基準をクリアする品質の種子が生産できなければならない。その生産技術を指導できる人材(トレーナー)の育成と、トレーナーによる農家の指導がプロジェクトの大きな柱だ。しかし白井さんがプロジェクトに参加した頃、その進み具合は順調とは言い難かった。「トレーナー育成のための研修を受けている農家は、種子生産の技術は学びたいけれど農家としての誇りから従来のやり方を変えられない——そんな状況でした」と苦笑いする白井さん。しかし、タイや日本での研修で種子生産の高い技術や整備された生産現場を知り、「このままではいけない」と彼ら農家の意識は大きく変わった。

## プロジェクト終了後もつながり続ける

同時に白井さんは、キルギス野菜種子組合(KVS)の能力強化に取り組んだ。KVSは種子生産を行う農家の集まりで、種苗会社との契約の窓口となる。「種子生産が軌道に乗るまでまだ時間がかかります。そこで、種子生産以外の仕事も組合で考えました」。たとえば国内のソラマメの産地を訪ねて種子の生産を受託し、国内での需要を掘り起こした。野菜や種子生産のコンサルタント事業も可能性があると白井さんは考えている。

さらにKVSスタッフの成長も著しい。事務局長のアマントゥール・サグンバエフさんと生産部長のアディレット・クランベコフさんはまだ若いが、ともになくてはならない存在になっている。「ふたりとも日本への留学経験があるので最初は通訳としての採用でした。しかし、仕事で必要な農業や種子生産、さらには契約について学び、今では国外の取引先からは、『このふたりがいれば安心して契約できる』とまで言われています」と白井さんはうれしそうに話す。

プロジェクトは20年で終了。トレーナーは24人、種子生産を行う農家は76軒で、日本や韓国などの種苗会社7社と契約するまでになった。しかし本番はこれからだ。白井さんはプロジェクト終了後もKVSの活動を気にかけていて、メールなどを活用しアドバイスも続けている。

協力隊時代も含めれば6年にわたってキルギスと関わり、プロジェクトを離れてもなんらかの形でKVSをサポートしたいと考える白井さん。「こうしたプロジェクトでは、技術を伝えることは、人を育てることにほかなりません。キルギスでがんばっているふたりをこれからも見守り、応援したいと思っています」。

## 種子生産のための研修

種子生産に必要な機材の説明を受ける研修員。中央で説明しているのは、プロジェクトに参加した野菜種子生産の専門家。

試験的に種子を生産するための畑で。種子を採るカボチャの整枝方法について説明を受ける研修員。

種苗会社と契約し、種子を採るために栽培しているキュウリ。

キルギス野菜種子組合
**KVSのトップ2**

KVS事務局長
**アマントゥール・サグンバエフ**さん

KVS生産部長
**アディレット・クランベコフ**さん

アゼルバイジャン

# 異国で咲いた友情の花

アゼルバイジャンの発電所建設のコンサルタント業務を担った東電設計の佐藤光行さんは、事業にかける思いと行動力で資金難を乗り越えた。

文●松井 健太郎

アゼルバイジャンは逼迫する電力状況を解決するために当時の同政府が火力発電所を建設。その1号機の建設要望が日本にとってアゼルバイジャンへの初めてのODAとなり、その後、同政府により2号機（写真）の建設事業が始まった。

2号機の中央制御室。2号機は安定的な電力供給によって経済発展を持続的なものにする目的で建設された。

熱効率の高い日本製の最新鋭のガスタービン、蒸気タービン、発電機。1号機と合わせ、国の電力需要の約1割を担っている。

## 「あきらめない！」事業継続の資金を調達

「最後までやり遂げよう」

佐藤光行さんの声が東電設計の会議室に響き渡った。2014年8月、アゼルバイジャン政府が建設中のシマル火力発電所2号機に対する日本からの円借款の融資が終了し、それ以降の資金はアゼルバイジャン側が担う予定になっていた。しかし、おりしも同国は原油安などの経済の変動により通貨が暴落。政府による資金確保が困難な状況だった。

コンサルタント業務を担っていた東電設計の社内からはODA事業の終了とともに「事業から撤退するべき」との声が上がった。その撤退論を1号機の建設から関わる佐藤さんは強い口調で制したのだ。「工事を行うアゼルエナジー社とは信頼を築き、頑張ってきた。プロジェクトをこのまま放置してしまうこと、そして私たちエンジニアが撤退するのは卑怯だ」と。

しかし、声を荒げた佐藤さんの頭に一抹の不安がよぎったのも事実だった。円借款の終了時点で、2号機建設の進捗率は予定の60パーセント以下。当時、建設資材は高騰し、従業員への給料の支払いも大幅に遅れるなど、アゼルエナジー社は経営破綻寸前だったからだ。佐藤さんは社内の営業部の応援を得てアゼルエナジー社と直接コンサルティング契約を結んだ。

早速、事業の立て直しを図ろうと、アゼルエナジー社に対し首相府に補助金を要請するよう提案した。ところが、長年の協力関係により親友といっていいほどの信頼を築いていたビド・シャリホフ副首相から「君とは交渉しても、アゼルエナジー社とは交渉しない」との返答。佐藤さんは「私は交渉する立場にない」としつつも、できることがあるならと半年間以上も協議を重ねた。日本大使館のサポートもあり、ついに政府から支援が承認された。半ば放置状態だった建設現場は息を吹き返し、工事は一気に進んだ。

そして、19年9月、イルハム・アリエフ大統領を迎えて2号機の竣工式が開催された。その前日、佐藤さんは中央制御室で出力上昇テストに立ち会っていた。食い入るように見つめるメーターが無事に最大出力に達した瞬間、感激で胸が詰まり床に膝をついてしまった。仲間と握手を交わした佐藤さんは、「あきらめないでよかった！」と喜んだ。

## 復興と友情の証しである桜で構内を埋め尽くそう

紆余曲折の末に完成した2号機だが、建設工事が始まった頃、11年3月11日には東日本大震災が発生した。日本にいた佐藤さんに、アゼルエナジー社の仲間から安否を気づかうメールが多く寄せられた。1週間後に予定通り現地に渡航した佐藤さんは、お土産に桜の苗木を3本持参したところ、それをアゼルエナジー社が発電所構内に植樹。「この桜は被災者への追悼と、日本とアゼルバイジャンの友好の絆の象徴です」と黙とうを捧げてくれた。義援金も渡され、「感動で言葉になりませんでした」と佐藤さんは話す。

翌12年、桜の木は可憐な花を咲かせた。そして、「震災復興に挑む日本人へのエールと、日本の協力に感謝を表すために、発電所を桜の花で埋め尽くしたい」と、アゼルエナジー社は「コーカサスで花サカス」という企画を東電設計の関連企業だった尾瀬林業とともに立ち上げた。100本以上の桜の苗木を自己資金で購入し、通関手続きを経て日本から輸入した。翌13年、多くの花が咲いたものの、それ以後はどの木も花を咲かせることはなかった。「土や気候が合わなかったのでは」と佐藤さんと発電所所員たちは残念がったが、ふたたび桜を植えようという話がいま持ち上がっている。「もっと桜のことを勉強し育てたい」と両者は、友情の花だけでなく、桜の花も咲かせる日が来ることを願う。

## 日本から届いた100本以上の桜の苗木

「桜は、希望・成功・前向きな姿勢のシンボル」

Sakura - ümid, uğur, nikbinlik rəmzi

「コーカサスで花サカス」プロジェクトは現地の新聞にも取り上げられ、桜が友好の証しとして広く知られた。

アゼルエナジー社が日本から輸入した桜の苗木。

**【記事より一部抜粋】**

シマル2号機コンサルタントのTEPSCO（東電設計）チームは、大震災のすぐ後、仕事のためアゼルバイジャンに飛んで来てくれた。自分たちの国が大変な状況となっているにもかかわらず桜の苗木を3本持参して発電所入り口付近に桜を植えてくれた。発電所所長らが黙とう、周囲に柵を設置した。大変感動的だった。

東日本大震災に見舞われ、日本では多くの桜も津波で流され、この年、日本人は桜を存分に楽しめなかった。しかしチームが持参した3本の桜は、このアブシェロン半島で咲いたのである。

日本人の技術の高さだけでなく、誠実な心にわが国の多くの人たちは感動した。

佐藤さんはバクー国立大学日本語科に日本文化の紹介を目的に着物50着を個人として寄贈するなど、両国の懸け橋となる活動を行っている。

11年前の春、日本の大学院での留学を終えてアゼルバイジャンに帰国しました。まもなくODA事業を請け負い、発電所を建設していたTEPSCO（東電設計）チームとの出合いがあり、今日の私の人生を決定づけた日となりました。無縁の電力の世界に飛び込み、これまで11年間、プロジェクトの運営の難しさに鍛えられました。

佐藤さんには「何事も絶対に最後まであきらめるな！いつもこれからがスタートだ！」と、私はずいぶん勇気づけられました。立派な発電所が完成し、チームの一員として日本のプロジェクトに参加できたことは誇りに思っています。電力インフラの課題・問題はたくさんありますが、引き続きベストを尽くします。

**何事もあきらめず、最後までやり遂げたい**

現地で10年来の相棒のスリヤ・ナヴィエバさん。日本語が堪能で、アゼルエナジー社との協議やアゼルバイジャン政府・関係機関との対応に力を発揮した。

イルハム・アリエフ大統領から竣工後の式典の場で佐藤さんに授与された勲章。知らされたのは授与発表の1分前というサプライズだった。

### Key Person

**東電設計 海外事業部**
**佐藤光行**（さとう・みつゆき）さん

シマル火力発電所建設事務所長。中国の火力発電所建設をはじめ、ロシア、クロアチアの発電所調査業務などにも従事。現在はアゼルバイジャンの電力セクター全体の現況を調査するため、JICAの協力のもとに情報収集と確認調査を実施している。

モンゴル

# 発展とともに税制も近代化へ

税収によって財源を確保することは、国や国民の生活を支えるためにかかせない。JICAは長年にわたりモンゴルの税制改革や新たな制度づくりに協力している。

文●坪根育美

2017年から20年までのプロジェクトの一環として実施された現地の国際課税研修に取り組む、モンゴル国税庁の税務調査官。

## 協力20周年記念式典を催行

2018年12月にJICAとモンゴル国税庁との協力20周年記念式典が行われた。

2008年以降はそれまでの10年に引き続き徴税機能の強化にも取り組んだ。そのなかで設立された滞納催告センター内の様子。

2019年の税制改革に向けて、モンゴル国税庁と同国大蔵省の共同作業グループと、日本の専門家との間で熱い議論が何度も重ねられた。

長く継続的な協力のおかげで今があります

### Key Person

**モンゴル国税庁長官**
**バトジャルガル・ザヤバル**さん

モンゴルの大蔵省、鉱業省、エネルギー省、国有資産管理庁などで勤務したのち国税庁へ。国税庁副長官を経て2017年に国税庁長官に就任した。「JICAと協力しながら歩んできたこの20年でモンゴルの税務行政は大きく変わりました」。

## 近代的な徴税システムの基盤づくりに挑戦

JICAが行う国際協力にはさまざまな分野があるが、国の財政を支える税金に関する貢献を知る人はそう多くはないだろう。1998年から20年余にわたり、徴税制度や法律の整備の協力をJICAが行っている国がある。それがモンゴルだ。

モンゴルでは90年代の初めごろより民主化が進み、それまでの社会主義経済から市場経済へと移行していった。しかし徴税に関わるシステムは、社会主義時代の体制のままだったため慢性的な国家財源の不足に陥り、市場経済の発展を妨げる原因のひとつになっていた。「市場経済への転換にともない、モンゴルにいままでなかった近代的な徴税制度づくりや法的環境の整備が必要でした。それには経験豊かなほかの国から学んでいかなければならないと思い、JICAに技術協力を要請することになりました」と、モンゴル国税庁長官のバトジャルガル・ザヤバルさんは語る。

98年からの10年間は、日本をお手本とした近代的な徴税システムを制度として定着させることに重点を置き、徴税手続きの改善や国税庁の職員である税務検査官*1に対する研修を制度化した。税務の基盤づくりに力を注いだことにより、国民一人ひとりの納税意識が向上し、2004年には税収も98年と比べて2倍に増加した。「税収が上がるということは国の予算が増えることを意味します。国民への公共サービスの予算が確保でき、生活の水準を上げることができるのです」と、ザヤバルさんは税務の重要性について話す。

## 国際課税という新たな課題に向けた税制改革

その後の10年間では、新たな課題として国際課税*2の制度整備に向けた取り組みも始まった。モンゴルでは2010年以降、金や銅、石炭などの鉱山開発が国の経済を支える主要分野として発展。それにともないモンゴルに進出する多国籍企業と外資企業が増加した。しかし国際課税制度が未整備だった当時は、それらの企業が得た利益の多くが国内で税金として払われずに国外に出てしまう問題が多発していた。

こうした状況を受けて、モンゴル国税庁はJICAの協力のもと国際課税に関する制度整備と税法の改正に取り組みながら、国際課税に対応できる国税庁職員の人材育成を開始した。これらの協力は税法の改正という大きな成果を生み出した。これにより他国からモンゴルへ進出してきた企業の利益に対して適切な課税ができるようになっただけでなく、国際課税に関する国際条約への加盟や国際的なフォーラムに参加できるようになり国際的な信用も高まった。

20年という時間をかけてプロセスを積み重ねてきたこれまでの税務行政におけるプロジェクトは成果を出し続けている。これは制度や法律の整備だけでなく、しっかりとした人材育成ができているからこそとザヤバルさんは考えている。「プロジェクトごとに研修があり、人を育てることをつねに継続して行っているのが成果につながっていると思います。いまでは研修を受けた職員が別の職員に教えることができる体制になっていますし、研修制度を職員自ら計画して実施できるようにもなりました」と誇らしげだ。またともにプロジェクトを進めるなかで、日本人の責任感の強さや税務職員としてのプライドを持った仕事ぶりに感銘を受けたという。「モンゴル国税庁の職員たちにも、日本人の仕事への向き合い方や姿勢が伝わっていると感じています」。

現在、モンゴルはコロナ禍下での国民の生活を支えるために国が税金を免除したり、光熱費を負担したりしている。「税務行政がしっかり行われていて税収による財源があるからこそできることです」と、ザヤバルさんは国税庁長官としての責務をあらためて感じている。

20年12月からは新たなプロジェクトがスタートした。モンゴル国税庁とJICAの歩みはこれからも続いていく。

### JICAの協力によるモンゴル国税庁の変革

| | |
|---|---|
| 1998-2000年 | 国税庁の徴税組織の抜本的な改革が行われた。 |
| 2000-2001年 | 不動産税や特別印紙税の創設。主要な税法の改正を提言書にまとめたものが国会で承認された。 |
| 2001-2003年 | 納税者情報の管理制度の構築。この活用により税務検査が効率化され、徴税金額が飛躍的に増大した。 |
| 2003-2005年 | 税務職員育成のための地方研修センターを設立。 |
| 2005-2008年 | 納税者電話相談センターとワンストップ納税者サービスセンターを設立。 |
| 2008-2011年 | 検査技術を習得するための日本での研修を実施。 |
| 2009-2010年 | 租税教育カリキュラムを作成し、学校に教材として配布された。また広報番組も放送された。 |
| 2013-2016年 | 滞納催告センターを設立。 |
| 2017-2020年 | 国際課税の制度整備、税法改正案の策定。（2019年に国会を通過し、2020年から施行された） |
| 2020年- | 改正税法の執行能力強化に重点をおいたプロジェクトがスタート。 |

*1 徴収・税務調査・納税者サービスなど税務当局が行うすべての業務を担う国家税務職員。

*2 複数国間で行われる事業などで出た利益に対する課税のこと。

タブレットを使用した電子そろばん教室。子どもたちはそれぞれのペースで学習を進めていく。

ウズベキスタン

# 日本での留学経験から教育改革を推進

**約20年前に日本に留学し、日本社会から大きな影響を受けたというサルバル・ババホジャエフさん。国の未来を担う人材を育てるため、教育改革に力を入れている。**

文●久保田 真理

## 留学生活で感じた伝統と現代が共存する日本

人口約3280万人のうち、24歳以下が約40パーセントを占めているウズベキスタン。生徒数の増加に教育環境整備が追いついておらず、学校や教員の不足をはじめ、教員の能力や教材の不足、民間教育サービスの地方格差など、課題を抱えている。ウズベキスタン政府はこれら教育部門の課題を重視し、その改善に向け優先的に取り組みを進めている。

その取り組みを支援するため、2019年8月よりJICAのプロジェクトが開始された。この実施に向けて大きく貢献したのが、当時のウズベキスタン国民教育省副大臣だったサルバル・ババホジャエフさんだ。ババホジャエフさんは人材育成奨学計画（JDS）[*1]で来日し、新潟県南魚沼市の国際大学大学院で経営学を専攻した経験がある。日本での経験が今回の実施に大きな影響を与えたと話す。

ババホジャエフさんは、自身の姉が大学のプログラムで訪日したことをきっかけに日本に興味を持ち、2000年にJDSに応募した。「姉と同じホストファミリーと暮らすことになり、日本のお父さん、お母さんから日本文化と社会についてたくさんのことを学びました。また、国際大学には世界40か国以上から留学生が集まっているので、国際色豊かな環境で学べたことも貴重な経験でした」と当時をふり返った。

2年間の留学を経て感じたのは、日本は伝統と現代的な側面をあわせ持った社会であるということ。文化や家族を大切にする価値観はウズベキスタンも同様だが、日本の治安のよさや科学・工業技術の高さに感銘を受けた。さまざまな経験から日本を尊敬するようになり、帰国後は日本とのつながりをつくる機会を探っていたという。

## 日本との協力で教育改革を推進

このJICAのプロジェクトに関わったデジタル・ナレッジ社の齋藤陽亮（ようすけ）さんは、ババホジャエフさんと面会したときの印象をこう話す。「日本語で話しかけられて驚きました。中央アジアの国々では非常に珍しいことだと思います。ウズベキスタンの未来のために教育を変えていきたいという熱い思いが伝わってきました」。16年末の新大統領就任後に発足した新政府は、教育分野の発展に力を入れた。デジタル・ナレッジのeラーニング[*2]システム（学習管理システム）を活用して国民教育省のICT活用の推進と民間教育市場の拡充が進められることになった。

プログラムでは、20年1月から3月までの期間、同国14校の7年生（日本の中学1年生）を担当している教員が数学などの教授方法をeラーニングで学んだ。「質問をして生徒自身が自律的に考える教え方に変わった」「eラーニング研修は対面研修と変わりがなく有効」といった声が教員から上がったという。また、民間の教育現場で教材が不足していたため、放課後の空き教室を使ってタブレットを利用した小学校低学年向けの電子そろばん教室や、低学年向けの英語教室と高学年向けの数学教室も実施した。さらには、新型コロナウイルス感染症の影響で昨年3月中旬から教育機関が閉鎖されたため、小学生と中学生を対象に数学の電子教材を全国の希望者に配信して、遠隔での学習機会を提供したという。

現在、タシケント情報技術大学学長を務めるババホジャエフさんは、ウズベキスタンの教育改革にさらなる意欲を示している。「新型コロナの影響で教育のデジタル化を早急に進める動きがありますが、プロジェクトから得たこれらの素晴らしい経験が後押しする可能性を秘めていると思います。ウズベキスタンと日本との協力関係がこれからも継続していくことを期待しながら、優れた教育システムを構築したいと考えています」。

*1 将来出身国の政策立案者となることが期待されている優秀な若手行政官を日本の大学院に招く人材育成奨学計画（The Project for Human Resource Development Scholarship、通称はJDS）のこと。

*2 インターネットを利用した学習形態のこと。

**Key Person**

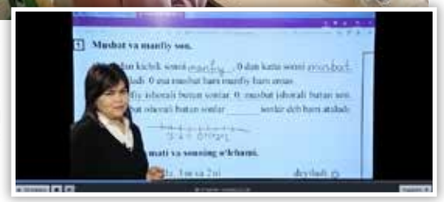
タシケント情報技術大学学長
**サルバル・ババホジャエフ**さん（左）

人材育成奨学計画（JDS）で、新潟県南魚沼市の国際大学大学院に2年間留学し、経営学を専攻。これまでの15年間教育分野に携わり、ウズベキスタン国民教育省副大臣を務めた。好きな日本食はすき焼き。現在も新潟県のホストファミリーとの交流を続けている。

新潟県に暮らすホストファミリーとババホジャエフさん。日本文化と社会についてたくさんのことを教わった。

国際大学大学院の修了時。ここで学んだ教育マネジメントの知識は、その後の仕事にたいへん役立ったという。

**放課後の時間を上手に活用できる**



放課後の空き教室を活用して実施された高学年向けの数学教室。数学は積み重ね学習が大切なため、個人で学習を進めてつまずきを防ぐ。

7年生の数学の教員を対象にした研修動画。日本の質の高い教授法を伝え、ウズベキスタンの教員の能力向上を目指す。

タジキスタン

# お皿を変えて、健康的なおもてなしを

客人を大切にする、おもてなしの文化があるタジキスタン。
ただ、そこには健康面での課題があった。
JICAの枠を超えて集まり、その解決に挑んだ合同チームのアイデアとは?

## 100倍の情熱で返してくれる人々

ある3か月間、見知らぬ者同士でチームを組み、行ったこともないタジキスタンの食文化を一気に調べ上げ、そこにある課題とその解決策を考えた人たち。そして今、日本で一番タジキスタンへ行きたがっている人たち。そう言い切ってもよさそうなのが、国際協力の新しいアイデアを生み出すプログラム「JICA Innovation Quest(通称・ジャイクエ)」において、「タジク式映え皿」を提案したチーム・タジキスターズのメンバーたちだ。

メンバーの小原瑠夏さんはこう語る。「どこか遠い国というイメージであったタジキスタンですが、日本にも共通するおもてなし文化や生活を知るにつれて、思いを馳せる近い国となりました。調査中に聞き取りをしたタジキスタンの方々は、こちらの問いかけに対して100倍くらいの情熱を持って答えてくれる、本当に情に厚い方々でした。実際に現地に行って彼らに会い、一緒に課題解決をしていきたいと強く思っています」。

## 文化を尊重したまま、油の摂取量を減らす方法

ジャイクエとはJICAの若手職員が発案し、JICA組織内の新規事業アイデア公募において採択されて2019年度に始まったプログラムだ。さまざまなバックグラウンドを持つ参加者とJICAスタッフがチームを結成、多様な知恵を結集することで途上国の課題解決をめざす。

そのジャイクエに参加し、19年11月に初めて顔を合わせ、タジキスタンの食に関する課題解決というテーマを与えられたのが、後にタジキスターズとなった6人だった。JICAの職員が2人、あとの4人は一般の会社員などで、うちタジキスタンへ行ったことがあるのは一人だけだった。

まずは留学生など在日のタジキスタン人と、そしてオンラインでつながったタジキスタン人15人ほどから、暮らしぶりや食文化などを聞き取っていった。そして浮かび上がってきたのが、次のようなことだった。

「客人へのおもてなしの心を持ち、家族を大切にする」「みんなで集まり、にぎやかに楽しむのが大好きなパーティピープル=〝パリピ〟でもある」「パーティのごちそうとして欠かせないのがプロフという食べ物。日本のチャーハンに近いが、油が大量に使われる」……。客人は神様の使いだからと、ごちそうでもてなす。客人もそれを平らげるのが礼儀だ。

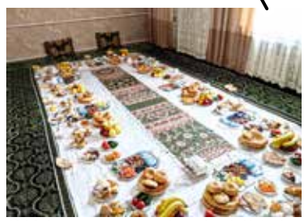
ただ、その料理が盛りすぎであったり、油が使われすぎたりするため、肥満や高血圧の人が多く、生活習慣病が増えているという現実が見えてきた。

おもてなしの文化は尊重したまま、健康的な食事を実現できないか——そして考えたのが「タジク式映え皿」だった。タジキスタンの伝統的な模様を施した大皿だが、中央が盛り上がり、上げ底状態になっている。その皿に料理を盛りつければ、量を少なくしても山盛りの見栄えは保ち、上げ底の下の部分に油がたまることで、油の摂取量も減らすことができる。

20年2月に行われたファイナル・プレゼンテーションでは、現地の文化に寄り添ったアイデアが評価され、参加5チームのうちの最優秀賞と、さらにオーディエンス賞も受賞した。本来は、最優秀賞をとったことで、その後タジキスタンへ調査に行き、アイデアの実現に向けた次のステップに進む予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航はまだ叶わないままだ。

メンバーの江本州陽(ともあき)さんは「コロナが収束したら、チームのみんなで現地へ行き、このアイデアに賛同してくれる陶器メーカーやレストランなどを見つけ、普及への実現に結びつけていきたい。まずはみんなで本場のプロフを食べ、油の量を確認してみたいです」と話していた。

### おもてなしの気持ちが料理に表れています!



結婚式をはじめとするお祝い事、宗教行事、ホームパーティなどで人が集まる機会は多い。心を込めた大量の料理で客人をもてなす。

多くの人が集まって食卓を囲むのがタジキスタンのスタイル。大皿に盛られた料理をみんなで分け合って食べることも多い。

タジキスタンの"国民食"の一つ、プロフ。日本のチャーハン的な料理だが、油が大量に使われる。

### Key Person

**A** タジキスターズ メンバー
**田中 真理子**(たなか・まりこ)さん
JICAの職員であり、チームの中で唯一タジキスタンへ行ったことがある。現在はブータン事務所の所員としてブータンに駐在。

**B** 同 メンバー
**吉開祐貴**(よしかい・ゆうき)さん
研究開発型のベンチャー企業への投資を行うリアルテックファンドに勤務。地球や人類の課題解決に資する科学技術を社会に広め、生かしていくことに情熱を燃やす。

**C** 同 メンバー
**江本州陽**(えもと・くにあき)さん
日立製作所に勤務し、新規事業開発やIT開発の取りまとめを担当。社外でも社会課題に対する新しいアイデアを創出するイベントなどの企画や開催を行う。

19年11月から約3か月、東京・渋谷にある「SHIBUYA QWS」にほぼ毎週ペースで集まり、アイデアを練った。中央にいるのは来日中だったJICAタジキスタン事務所のスタッフ。貴重な意見を聞かせてもらった。

### Key Person

**D** 同 メンバー
**福田紗千**(ふくだ・さち)さん
戦略コンサルティング会社に勤務。人々の価値観や社会との関係性、そこに隠れた変化の萌芽を探求。「やさしさの価値を備えた新たなアイデアを世の中に届けたい」。

**E** 同 メンバー
**小原瑠夏**(こはら・るか)さん
「日本の技術とモノで人々の生活に貢献したい」という思いで、積水化学工業に入社。ジャイクエがきっかけで、現在は共創を軸にした新規事業開発に携わる。

**F** 同 メンバー
**波多野 誠**(はたの・まこと)さん
JICA職員でジェンダー平等と貧困削減推進に従事中。「ジャイクエで、JICA内外メンバーによる共創で新しい国際協力を創り出す可能性を感じました」。

### 目指せ、タジキスタンの伝統工芸職人とのコラボ!

タジク式映え皿を試作中。市販の皿に紙粘土で造形を加えたもの、陶器として焼いたもの、木製のものといった試作品を作った。

JICAタジキスタン事務所の協力を得て、オンライン会議形式でタジキスタンの現地の人にもインタビューを行った。

まずはつてを頼って日本で会えるタジキスタン人にインタビューを行った。どのような食文化があるのかを聞き取っていった。

試作品の一つ。中央が盛り上がっていることで、盛りつけの量を3分の1に減らすことができる。一人あたりの油使用量を年間2.4リットル減らせる試算も出た。

「タジク式映え皿がある暮らし」をイメージした図。おもてなし文化はそのままに、健康的な暮らしを実現してもらう。

ジャイクエのファイナル・プレゼンテーションでは最優秀賞とYoutube配信の視聴者からの投票で決まるオーディエンス賞を受賞した。

キルギス

# 日本のブランドとともに世界品質のもの作りへ

キルギスの特産品を作って、国内外へ広げよう!
そんな思いで始まったJICAのプロジェクトから生まれた商品が、
10年にわたって「無印良品」で販売され、多くのファンに愛されている。

毎年クリスマス商戦を控えた11月になると、シンプルな日用雑貨を国内外で展開している「無印良品」(一部店舗)に、キルギスで作られたフェルト製の動物やバッグ、ペンケースなどが並ぶ。定番となっているフェルト製のヒツジはふわふわで、愛くるしい顔がチャーミングだ。

## 商品として魅力のあるものを作る

これらの商品は、JICAがキルギス北部のイシククリ湖地域の村落で行っている「一村一品運動*」と無印良品を運営する良品計画との連携から生まれている。

両者の連携は、小売業の立場から途上国のもの作りに協力し、世界のよいものを日本に届けたいと考えた良品計画が、その対象となる国をJICAに相談したことから始まった。

プロジェクト開始当初、生産管理に携わっていた同社の久保田裕子さんは、「キルギスとは当初からビジネスとして取引することを考えていました。作業場所の衛生管理や安全性はもちろん、規定どおりのものを製作し、納期までにきちんと日本に届けていただくことが条件でした」と話す。

しかし当初は、良品計画が求める品質の商品を作ることが難しかった。最初に作ったのは太陽系の惑星をイメージさせる丸いオーナメント。キルギスの人たちは羊毛からフェルトを作る素晴らしい技術はあったが、すべて同じ形のボール状にしたり、飾りつけ用のひもを取れないように確実に付けたりする作業に慣れておらず、製品作りの習得に1年が費やされた。

そんな無印良品の品質基準をクリアするために、キルギスと無印良品の間に入ったのがJICA専門家の原口明久さんだった。商品を作る村の女性たちにとって厳しい要求もあったが、一つひとつクリアしてきた。

「たとえばヒツジが立つためには、足の長さが同じでなくてはならないのですが、それが難しい。そこで長さを簡単にそろえられる物差しを手作りしました。また、ヒツジの顔が同じになるようにまず絵を描いてもらい、自分の描く顔と手本との違いを理解してもらったこともありました。こうした細かな工夫をたくさん積み重ねてきました」

プロジェクト終了後、現地の人たちの手で商品作りが継続できてはじめて、その国や地域の力になったといえる。良品計画の品質基準に基づき、ていねいに商品を作り続けた結果が、10年という長期間の取引に表れている。

キルギスで作業工程や品質管理の確認をする久保田さん(右から2人目)。

ショルブラク(塩の泉)村でフェルトの動物を作る女性たち。村は塩水しか出ず農業ができない。手に職があれば、生活の糧となる。

お母さんが作ったフェルト製品をうれしそうに持つ子どもたち。フェルト作りをするお母さんを手伝うため、お兄ちゃんは弟と妹の面倒をみる。

2020年11月に発売されたフェルト製の動物。ヒツジのほかにヤギ、ユキヒョウ、ヤク、ウサギなどキルギスに生息する動物がモチーフになっている。

## 商品を通しておたがいの国のファンになる

こうした成果を出したことで、キルギスでは一村一品運動を全土に広げようという機運が高まっている。また、2021年にはイシククリ湖の村に一村一品運動の工場を建て、輸出できる品質を備えたもの作りの拠点にする予定になっている。「JICAのプロジェクトで作っているのはフェルト製品のほかにハチミツや、高い栄養価から世界中で注目されている果実シーバクソンのジュースやオイル、せっけんなど数十種類もあります。工場ができて、国際規格に合った商品がつくられるようになれば、輸出しやすくなると思います」と原口さんは次のステップに意欲を燃やしている。久保田さんも「よい品質のものがあれば、フェルト製品以外の商品も扱っていきたい」と話し、期待をうかがわせる。

キルギスの人たちが丹精込めて作った商品を日本の消費者のもとに届けるJICAと無印良品の取り組みは、これからもおたがいの国にそれぞれのファンを育んでいくだろう。

キルギスに合った一村一品運動にこれからも協力します

**Key Person**

JICA専門家
**原口明久**(はらぐち・あきひさ)さん

JICA青年海外協力隊でガーナに赴任。以後、カンボジア、エチオピア、モンゴル、カンボジアでJICAのプロジェクトに携わる。2009年からキルギスの一村一品運動に協力。「四季折々の美しさがあり、飽きることがなかったですね」。

生産者の手作りによる、ていねいなフェルト製品を届けたい!

**Key Person**

良品計画
**久保田 裕子**(くぼた・ひろこ)さん

プロジェクト開始時に生産管理の担当として関わる。キルギスには5〜6回訪れ、その自然の美しさに魅了された。今回、ふたたびプロジェクトの担当者として「よい商品をお客さまに届けたい」と意欲を燃やす。

＊1980年に大分県から始まった地域振興事業。地域ごとにひとつの特産品を作ることで地域の活性化を図った。この手法は、OVOP(One Village One Product)運動としてJICAの事業を通して途上国へも広がっている。

特集 内陸アジア
彩り際立つフロンティア

# 遠くて近い国々の魅力
# JICAスタッフが語る内陸アジア

内陸アジアに関わり、現地の文化や課題を肌で知る3人が、地域の魅力やこれからの日本との関係を語る。

**JICAキルギス事務所**
**カザフスタンフィールドオフィス**
**村山満穂**(むらやま・みつお)さん(右)

内陸アジアを初めて訪れたのは青年海外協力隊員としてモンゴルで活動したとき。その後JICA東・中央アジア部でモンゴルを担当し、2017年4月からカザフスタンフィールドオフィスに勤める。

**『mundi』読者に伝えたい、内陸アジアの魅力**

内陸アジアの料理は、世界各地に出張経験のあるJICAスタッフたちによれば「日本人の口に合う」そうです。お米もあり、スパイスよりも出汁に近い味つけが多いせいでしょうか。遊牧民の国も多いので、羊肉や馬肉も一般的に食べられます。寒そうなイメージがあるかもしれませんが、カザフスタンでは室内は暖かく、真冬でもTシャツ1枚で過ごせますのでご心配なく。

街路樹も凍りつく冬のヌルスルタン。

円借款で建設されたイルティシュ川にかかる橋。

JICAの元研修員(中央)と現地スタッフ。

フィールドオフィスの現地スタッフ。2016年度のタジキスタンでの同窓会にて。

カザフスタンのトゥズバイル塩湖。

カスピ海沿岸の街、アクタウ

**JICA東・中央アジア部**
**田中祐真**(たなか・ゆうま)さん

外務省の在外公館専門調査員としてカザフスタンの日本大使館に3年間勤務。2020年4月からJICA東・中央アジア部で、タジキスタンとトルクメニスタン、ウズベキスタンを一部担当。

**『mundi』読者に伝えたい、内陸アジアの魅力**

カザフスタンは、訪れたら新しい発見があるはずです。治安がよく、また文化としてもてなしが大好きで、とても人々が温かい国です。街も清潔で過ごしやすいといわれますね。ちなみに首都のヌルスルタンは、日本の建築家である故・黒川紀章氏の都市計画案に基づいて開発されています。

「5本の指」を意味するカザフ料理の代表、ベシュバルマック。

お祝いの席で振る舞われるヒツジの頭の丸煮!

## 中から見た内陸アジア

**上原**:内陸アジアは日本人の多くにとっては遠く、まだまだなじみがない国々でしょうね。

**村山**:具体的なイメージが湧かないことや、もしかすると独裁政権の国が多くて怖そうな感じがすることも日本人にとってはとっつきにくい理由の一つかもしれません。この地域は国名に「〜スタン」とつくところが多いんです。それを聞いて世界の人は紛争が多い国を連想するのか、「治安が悪いところだよね」なんて言われてしまう。

**田中**:実は現地の人たちもけっこう気にしているんですよ。キルギスはまさにキルギスタンから国名を変えましたよね。カザフスタンでも過去にはけっこう真面目に議論されて、「カザフ国」に変えるという案もあったとか。

**村山**:カザフスタンは特に、すごく治安がいいんですけどね。親日的な国が多い地域でもあります。

**上原**:この地域には日本センター[*1]もたくさんあって、そこで日本語を学んだという人も多いですよね。

**村山**:もちろん東南アジアと比べれば少ないですけどね。ちなみにモンゴルは人口およそ330万人と絶対数は少ないですが、日本語を勉強している国民の割合で言うと世界でもトップクラスなんですよ。

**田中**:カザフスタンでは、もともと日本人とカザフ人は先祖が一緒なんだと現地の方はよく言います。バイカル湖のあたりに、ある民族がいて、魚が好きな人たちは東の海を渡って日本にたどり着き、お肉が好きな人たちは西へ渡ってカザフ人になったという話がけっこう信じられているんです。キルギスやモンゴルでもどうやら一緒らしいですね。ちなみに私は非常にカザフ人顔のようで、現地では確実にカザフ人だと思われて「なんでカザフ人なのにカザフ語が話せないんだ!」と怒られたこともありますが……それぐらい、日本人と顔立ちが近いわけです。

## 地域の課題と向き合う

**上原**:カザフスタンは長年の課題として、資源依存型の経済から脱却して持続的な経済成長をするために、産業の多角化を目指しています。それには中小企業の振興が重要となっており、たとえば「カイゼン」[*2]の専門家を派遣するなどの協力をJICAが行ってきました。内陸アジアの国々の中では発展が目覚ましく、私がフィールドオフィスに勤務していたときには、カザフスタンが地域の他の国にODAなどで協力していきたいという動きがあったんです。今後、KazAID[*3]というカザフ版のJICAのようなODA実施機関が活動を進めていく予定です。

**村山**:地域に話を広げると、実はこのあたりは資源が採れる場所がほかにもありますが、開発が追いついていません。もっと資源を生かせればと思う国もありますね。もちろん資源開発の次のステップには、カザフスタンと同じように多角化の必要性があるのですが。

**上原**:地域全体の課題なら、ほかには物流でしょうか。〝内陸〟アジアの名称のとおり海がないので、国内でどう物流を発展させていくかは経済面でも重要になってきます。物資を適切に運搬するコールド・チェーン[*4]の整備と、物の保管技術や管理などの人材育成が、地域全体で求められている分野なのかなと思います。

**田中**:カザフスタンの場合は内海ですがカスピ海があって、現在は港を整備しているんですよね。カスピ海を通ってトルコ、そして欧州へ輸送するルートとして期待されています。また内陸アジアの国々は若者が多いのですが、人口そのものは少ない。これも地域的な課題です。その点で今注目されているのがウズベキスタンで、ここは域内では珍しく人口密度の高い国です。商売が非常に上手な人たちとしても知られています。

**村山**:域内でも注目されていますよね。ただ、カリーモフ前大統領によって鎖国状態にあったので、カザフスタンと比べると閉ざされている部分が多い。現在はミルジヨーエフ大統領のもとで開かれつつありますが、今のペースを見ているともう少し時間がかかるのかなというのが私の実感です。

## これからのつながりかた

**上原**:キルギスでは最近、日本語のできる人が日本で観光分野の仕事に就いたり、あとは介護の現場で活躍されたりしています。介護を受ける側が、外国人の職員さんに緊張してしまうというケースがあるのですが、田中さんの話にもあったように、内陸アジアの人は日本人と顔が似ているのでわりとすんなりなじむのだとか。そのようにビジネスの場面でも、今後もっと交流が増えてくるのではないかなと個人的には期待しています。

**村山**:カザフスタンは国内の格差はまだまだ大きいですが、JICAが協力をしている国の中でも所得が高い国です。従来のODAと並行して、民間企業も巻き込んだビジネス交流をしたいという相談はカザフスタン側からもあるんです。民間連携事業のようなメニューをうまく使って、この地域に対して協力を継続することが今後ますます必要になってくるのかなと思います。すでに関連の研修も開始されていますが、このような協力をさらに拡充し人材交流を活発にできたらいいですね。

**田中**:ソ連崩壊後から長年続けてきたJICAを含む日本政府の協力によって、さまざまな分野でつながりの〝芽〟が今まさに育ちつつあります。カザフスタンにいたころ、一般の方でも「うちの地元の橋を造ってくれたのは日本なんだよ、ありがとう」なんて言ってくれることがありました。地元にも根差すつながりはこれからも大事にしたいですよね。今後の発展と足並みをそろえながら、継続的な協力関係を維持していきたいと思います。

カザフスタンの首都ヌルスルタンの街並み。

タジキスタンの現地の少女。

キルギスのスキー場

草原が美しい夏のキルギス。

**『mundi』読者に伝えたい、内陸アジアの魅力**

多民族国家のカザフスタンやキルギスでは、外国人ということを意識しないで暮らせるのが個人的にはとても魅力的でした。からっとしている気候も、日本の高温多湿な夏が苦手な人には過ごしやすいですよ。キルギスの場合、美しい自然のほかにスポーツやレジャーなどのサービスが安価なのも特徴です。

**JICAキルギス事務所**
**上原牧子**(うえはら・まきこ)さん(中央)

JICAの開発調査団のロシア語通訳としてカザフスタンを訪問したことが内陸アジアとの出合い。2014年4月から17年4月までキルギス事務所カザフスタンフィールドオフィスに勤務。

*1 日本人材開発センター。市場経済移行国における「顔の見える援助」として、またビジネス人材育成、日本語教育、日本との交流および相互理解促進の拠点として構想され、2000年より順次開設。現在、東・中央アジア、東南アジア地域の9か国に10センターが設置されている。
*2 日本の品質管理、生産性向上のための手法の総称。
*3 カザフスタン共和国外務省管轄下の組織として設立されたODA実施機関。
*4 野菜などの鮮度を保つため、冷蔵庫や冷蔵車で保管・輸送する仕組み。

# JICA海外協力隊がゆく Vol. 27

子どもたちに寄り添いながら
絵を描くことやものを作ることの楽しさを伝えた
隊員の活動を紹介します。

構成●坪根育美

## in キルギス
# 山本果奈

やまもと・かな
出身地：兵庫県　職種：美術
任期：2018年10月〜2020年8月（特別任期短縮）

**子どもたちの想像力を伸ばしたい！**

いまから6年ほど前に旅先のコスタリカで知り合った企画調査員の方からJICAボランティア事業について話を聞き、協力隊の活動に興味を持ちました。大学では美術のなかでも染色を専門に学び、高校の工芸と美術の教員免許を取得。卒業後は伝統的な技法を用いて着物や帯を染める会社に勤務していました。こうした大学時代の学びや社会人経験などで得たスキルを幅広く生かせると思い応募しました。

私はキルギスのカラコル市にあるカラコル第4番学校に赴任しました。キルギスの公立学校は通常1年生から11年生（日本の高校2年生）まであります。私はおもに5年生から7年生に日本の「美術」や「図画工作」に相当する科目を教える活動に携わりました。キルギスの図画工作の授業は、お手本どおりに忠実に描くこと、作ることが重要視されてきました。その影響もあって、お手本どおりにできないことが原因で絵を描くことやものを作ること自体を嫌いになってしまう子どもも少なくありません。またうまくできない子どもたちに対する学校側のフォローが少ないこともあり、子どもたちの習熟度や理解度に差があることも課題でした。

そのため私は授業の間、つねに教室を歩き回りながら子どもたちに声をかけ、できるかぎり生徒一人ひとりの習熟度に合わせた指導を心掛けました。授業では複数の例を提示したり、いろいろな表現のパターンを実際に目の前で描いて見せたりすることで想像力が広がるようにしました。さらに、絵を描いたりものを作ったりすることが好きな子どもを対象とした放課後のクラブ活動の指導も大切にしました。こうした活動を続けていくなかで、少しずつですが子どもたちが図画工作の楽しさを実感している様子を見たり、隠れた才能を発見したりしたときは本当にうれしかったです。

現在は帰国して児童絵画教室や美術・工芸に関わるワークショップの講師をしています。ゆくゆくは仕事を通じて任地の先生や生徒たちと芸術で交流していけるようになったらいいなと思っています。

＊ 隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を担う。

授業中に教室を歩き回って子どもたちに声をかけることを大切にしていた。

カラコル市の街の広場に飾る雪だるまの像を先生たちと作る山本さん（左）。材料は発泡スチロールを使用。

新年を祝う絵を描く授業では、日本の年賀状を紹介。楽しくにぎやかな黒板になった。

## キルギス事務所から ひとこと

従来行ってきた模写・視写に重点を置いた指導ではなく、美術（図画工作）を通して子どもたちの想像力を養いたいという学校の意向があり、派遣要請につながりました。山本さんは、日々の授業で使う資料作成や絵画制作の実演を行うだけでなく、授業中に声をかけることを大切にし、子どもたちに寄り添いながら活動に励んでいました。

企画調査員（ボランティア事業）
**乗松一久**（のりまつ・かずひさ）

## +one information
## 「肉好き」な民族の国で

キルギスの人たちは、顔立ちが似ている私たち日本人に対して親しみを込めて「われわれは昔兄弟だった。魚好きが日本人、肉好きがキルギス人になったんだよ」と、よく言います。この言葉のとおり多くのキルギス人はお肉が好きです。そんなキルギスでのお肉にまつわる思い出を。

まずキルギスの伝統的な料理は、遊牧民族ということもあってかシンプルな調理法で素材の味を生かしたものが多いのが特徴です。市場に行けば、羊肉、牛肉などが部位を余すことなくワイルドに並べられています。ちなみにキルギス人は大多数がムスリムのため、ほとんどの人が豚肉を食しません（豚肉はほかの民族の人たちが市場の隅の方でこぢんまりと販売しています）。

忘れられないのは、先輩隊員のホームステイ先で年始を祝う食事会に参加した際、庭で生きた羊をさばく場面に立ち会ったことです。まず神への祈りから始まり、その後に家の男性がほふります。何といっても最初の一突きからその後の手際のよさに驚きました。皮を剝ぎ、肉と内臓に分けたら女性の仕事。肉と内臓についた汚れを取ってきれいにし、調理へと進みます。今までそこに生きていた羊の、そのお肉で作られた数々の料理には、おいしいということ以外に何とも言えない切なさ、そして大きな感謝がありました。

私はまさしく「命をいただく」という現場を体験し、これまで何気なく口にしてきた多くの命のありがたみにあらためて気づきました。肉好きの多い国、キルギスならではの思い出深い出来事です。

イラスト●さかがわ成美

世界につながる教室⑭

# 授業でSDGsを学ぶ

## 宮崎市立清武中学校 総合的な学習の時間

学校の授業で取り上げる機会が増えている持続可能な開発目標（SDGs）*。
宮崎市立清武中学校では、総合的な学習の時間にJICAと協力して授業を実施。
生徒たちはSDGsへの理解を深めた。

生徒たちが作成したリポート。どれも力作ぞろいだ。

オリエンテーションでSDGsについて説明する田代さん。

### 授業にJICAが協力

宮崎市立清武中学校では、2020年度の3年生の総合的な学習の時間に、SDGsをテーマにした10時間（6日間）の授業を行った。

SDGsという大きな題材を授業でどう扱えばいいのか――過去の経験が少ない中、準備を進めていた英語科教諭の太田京子さんが重視したのは「日本と世界のつながりを実感し、SDGsをジブンゴトとしてとらえられる」内容にすることだった。「生徒たちの多くは、SDGsという言葉は知っていても、17の目標など具体的なことは知りませんでした。ですからSDGsについて学ぶ下地をつくる時間がとても大事だと思いました」。

そこで太田さんが協力を求めたのが、JICAの出前授業でつながりが生まれたJICA宮崎デスクの田代芽衣さんだった。二人で何度も相談を重ねて授業内容を考えた。「こうした講義は話す側の一方通行になりやすいので、『天ぷらそばの材料のうち外国産は？』とクイズで日本と外国とのつながりを実感させたり、SDGsに関連した動画を見せたりしました」と田代さんは工夫した点を話す。

また、具体的な体験談があると生徒が授業に集中しやすいと考えた太田さんは、2012年にJICAの教師海外研修で訪れたフィリピンでの体験も紹介した。「七夕などの行事や日本の文化を、毎月11日に村の人々に紹介している女の子に出会ったことを話しました。東日本大震災の翌年に、遠く離れていても日本にエールを送ってくれていることに感動したからです。授業後のアンケートに『先生がそんな体験をしていたことを初めて知った』『日本と世界はつながっているんだ』『他国の貧困と日本は無関係ではない』などと書かれていて、生徒たちが理解してくれたことを感じました」と太田さんは話す。

### SDGsをジブンゴトとしてとらえた生徒たち

そして、生徒たちはSDGsの目標を一つ選び、それについて調べ、目標達成のために自分ができることを考えてリポートにまとめた。リポートはグループ内で講評し合い、最後に代表の4人が全員の前で発表した。途中の授業にも参加して生徒をサポートしてきた田代さんは、「最初はSDGsの基本的な内容もよくわからなかった生徒たちが、とてもよく掘り下げすばらしいリポートをまとめていました」と生徒たちの成長に感動したと話す。太田さんは、ほぼすべての生徒がSDGsをジブンゴトととらえることができたと感じた。「たとえば目標3の『すべての人に健康と福祉を』を選び、聞こえない不安や聴覚障害について調べた生徒は、もともと持っていた手話への興味が出発点でした。目標6の『安全な水とトイレを世界中に』を選んだ生徒は、いつも使っている公園のトイレの衛生状況を調べ、ついでに掃除もしたそうです。リポートからはSDGsを自分に関係する問題だととらえ始めたことがわかりました」。

この授業は地元の『宮崎日日新聞』で報道され、宮崎市内で行われた国際ミニフェスタでは生徒たちのリポートが展示された。「田代さんが広報活動をしてくださった結果です。反響も大きくて、ほかの学校から『同じような授業に取り組みたい』と問い合わせがありました。また学校内でも多くの先生がSDGsを教えることの意義に共感してくれました」と話す太田さん。この経験を来年度にもつなげていきたいと力強く語った。

＊「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。2015年の国連サミットで採択された。



## 清武中学校 3年生 SDGsをテーマにした総合的な学習の時間

2020年の秋に実施された
10時間の授業の流れを紹介しよう。

### 1・2時間目 SDGsについて知る

フィリピンでの体験を話す太田さん。

ゲストティーチャーとしてJICAの田代さんが、ユニセフや国連広報センター、JICAの資料や動画を活用してSDGsについて紹介。その後生徒は、SDGsの17の目標から一つ選び、マインドマップを使って疑問点や課題を出す。

目標から連想される事柄を書いていくマインドマップ。

### 3～5時間目 目標を達成する方法を調べる

同じ目標について調べる生徒同士でグループをつくり、教員の指導のもとに資料やインターネットで必要な情報を収集する。

用意されたシートに沿って、調べたことをまとめる。

### 6～8時間目 調べたことをまとめる

調べた内容をもとに自分ができることを考え、A4の紙1枚に自由な形式でまとめる。作成にあたっては、読んでもらう相手を意識させる。

### 9時間目 まとめたリポートを評価する

作成したリポートをグループ内で回し読みし、コメントを書いた付箋を貼って渡す。これまでの学習を各自でふり返り、教員が作成した自己評価表に記入する。

グループで講評し合い、感想を付箋で貼る。

### 10時間目 代表の発表・講話・まとめ

最後の授業でまとめを話す田代さん。

調べた内容、自分にできることを代表者4人が発表。自分とは違う意見を知ることで、多様な視点があることが理解できる。さらにSDGsへの理解を深めるために、再度JICAの田代さんが講話を行う。最後にこれまでの授業で考えたことやこれから自分が取り組む行動についてふり返り、授業を終了した。

代表として発表する生徒。

宮崎市立清武中学校 教諭
**太田京子**（おおた・きょうこ）さん（左）
JICA宮崎デスク
**田代芽衣**（たしろ・めい）さん（右）

授業を行うにあたって、二人は何度も相談を重ねた。「出前講座などを行い、SDGsや国際協力を効果的に伝えるJICAの知見はとても勉強になりました」と太田さんは話す。「コロナ禍下で外に出る仕事が少なくなったことが幸いしてじっくりと取り組めました。自分自身にとっても貴重な経験になりました」と、田代さんにとっても学びの多い授業になった。

# 戦禍の記憶と多様な文化

# Lao People's Democratic Republic

地球ギャラリー

EARTH GALLERY Vol.149［ラオス人民民主共和国］

写真・文●堀内 孝（写真家）

ジャール平原には、石壺が一面に広がる「サイト」と呼ばれる地域が点在する。
中でもポーンサワンの西8キロにあるサイトは最大の規模で、最も大きな石壺が見られる。

ボーンサワンから北東へ約50キロ。高床式の建物が並ぶシェンキャオ村では、
タイダム族の女性がラオスの伝統的な巻きスカートのシンを織っていた。

シェンキャオ村では、人を雇って小規模の織物工房を営む人もいた。
天然染料を使った染色から機織りまでを一貫して行い、
展示販売も行っている。

ひ孫を抱き、穏やかにほほ笑んでいたターチョーク村のモン族の女性。
年配の女性は日中、子守をしたり刺繍をしたりしてのんびりと過ごしていた。

ナピア村でアルミのスプーンを作っていた
ペップチャン・タラウォンさん。
材料は人から買うこともあれば、
自分で拾ってくることもあるという。

工房の一角には販売所が設けられ、スプーンのほか、
キーホルダーやアクセサリー類などたくさんの製品が並べられていた。
販売は妻が担当する。

麺作りで知られるナウー村。20年以上のキャリアを持つという女性は、熱したプレートに
水で溶いた米粉をのばし、フーと呼ばれる麺を手際よく作っていた。

ターチョーク村では、モン族の男性が激しく体を動かしながら、
竹製の楽器ケーンの演奏を見せてくれた。
笙（しょう）の一種で、ラオスを代表する楽器だという。

ボーノイ温泉に浸かってくつろぐカムー族の男性。
周辺には簡単なトレッキングコースなども整備されており、
宿泊してゆったり過ごすことができる。

山あいにあるボーノイ温泉周辺には多くの少数民族が暮らす。
温泉横を流れる川を眺めていると、
何人ものカムー族の家族が薪を背負って歩いていった。

旧県都のムアンクーンにある寺院、ワット・ビアワット。
ベトナム戦争時、アメリカ軍による大規模な空爆によって破壊され、
仏像とわずかな柱だけが残る。

ムアンクーンには、アメリカ軍の空爆で破壊された建物も保存されていた。
フランス植民地時代に建てられた病院だという。戦争の悲惨さを伝える建物だ。



朝霧が立ち込めるラオス北東部の町、ポーンサワン。標高１０００メートルを超え、1月は特に冷える。私は車をチャーターし、郊外にあるジャール平原へ向かった。謎の石壺を見るためだ。

ラオ族のソム・ホンさんが運転する車は、まずツーリストインフォメーションセンターに止まった。裏庭に案内されると、おびただしい数の爆弾の外殻が目に飛び込んできた。ベトナム戦争時、アメリカ軍がラオスの内戦に介入し、この地域に激しい空爆を行ったという。

「小学生のころ、ボール大のクラスター爆弾を拾い、投げ合って遊んだことがあるんです。それを家に帰って父親に話すと、思い切り殴られましたよ」とソム・ホンさん。不幸にも、こうした不発弾で二人の友人を亡くした。「現在も大量の不発弾が残っていて、被害が絶えません」と話す。

途中立ち寄った旧県都のムアンクーンにも、空爆を受けた寺院が残っていた。寺院の仏像の片目はつぶれ、片腕の一部がえぐれている。空爆のすさまじさを想像させる、心痛む光景だ。

やがて車は大きな石壺が一面に広がる〝サイト〟と呼ばれる地域に到着した。代表的なサイトは三つあり、不発弾が除去され、安全に見学できる。

最初に訪れたサイトには二つの小高い丘があり、背丈ほどの細長い石壺が並んでいた。全部で１００個ほどあるという。続くサイトでは、水田が見渡せる丘の上に約１５０個の石壺が横たわっていた。

最も見応えがあったのは最後のサイトだ。大人がひとり、すっぽりと入れる大きさの石壺がごろごろと転がっていた。大きいものは、高さ約3メートル、重さが6トンもあるという。石壺群は2か所に別れて広がっており、その数は３００以上にのぼる。

調査によれば石壺の総数は２０００個以上あり、紀元前５００年から西暦５００年ごろまでに作られたそうだ。用途は、酒壺や米壺などさまざまな説があるが、近くで人骨や副葬品などが見つかっていることから埋葬に使われたのではないかという。鉄器時代の貴重な遺跡と評価され、「ジャール平原巨大石壺群」は２０１９年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

ソン・ホンさんは石壺巡りの合間に、ナピア村にも連れて行ってくれた。不発弾のアルミ材を使ってスプーンやアクセサリーなどを作る村だ。ペップチャン・タラウォンさんは溶かしたアルミを型に流し込み、ちょうどスプーンを作っていた。アルミ1キロから30本のスプーンが作れるという。戦争の負の遺産を巧みに利用して生活の糧を得るとは、なんともたくましい人たちだ。お土産に爆弾の形をしたキーホルダーをひとつ買い求めた。

翌日は、ポーンサワン郊外にある少数民族の村を訪ねた。カーブの続く道を30キロほど走ると、ターチョーク村に着いた。モン族の女性が家の軒下で刺繍をしている。カラフルで緻密なデザインが印象的だ。

次に訪れたシェンキャオ村では、タイダム族の女性が糸つむぎや機織りをしていた。展示施設にはスカーフやショール、民族衣装のシンなどが並ぶ。質の高い織物ばかりだ。

さらに足を延ばし、川沿いにあるボーノイ温泉を訪ねた。コテージやレストランを備え、宿泊も可能という。温泉では、近くに住むカムー族の人たちが肩まで浸かり、仕事の疲れを癒していた。私もしばし足湯を楽しみ、冷えた体を温めた。

首都ビエンチャンからポーンサワンまでは飛行機でわずか30分。ラオスの知られざる歴史と少数民族の暮らしや手仕事が体感できる町は、新型コロナウイルスの感染が収束したら、新たな観光地として注目されそうだ。

**堀内 孝（ほりうち・たかし）**
１９６３年宮城県生まれ。写真通信社を経て、フリーの写真家になる。90年よりアフリカのマダガスカルを訪れ、人々の暮らしや独自の進化を遂げた動植物を取材。97年からは東南アジアにもフィールドを広げ、少数民族の暮らしと手仕事を撮影している。著書に『マダガスカルへ写真を撮りに行く』（港の人）、『マダガスカルのパオパブ』（福音館書店）、『青い海をかけるカヌー マダガスカルのヴェズのくらし』（福音館書店）、『海と川が生んだたからもの 北上川のヨシ原』（福音館書店）など。

左：シェンクワン県にあるポーンサワンは、1970年代につくられた新しい県都。ベトナムとの国境が近く、ベトナムナンバーのトラックも頻繁に行き交っていた。中：ポーンサワンのツーリストインフォメーションセンターに展示されていた不発弾。町にはここ以外にも、不発弾について詳しく展示した2か所の施設がある。右：ポーンサワンのメインストリート、サイサナ通りにあるレストラン。アメリカ軍に投下された爆弾の外殻を入り口に並べ、装飾として使っていた。

教えて! 外務省

# 知っておきたい 国際協力㉙

©DLE
外務省ODA広報キャラクター ODAマン

ユーラシア大陸のほぼ中央に位置する中央アジア・コーカサス地域。その特色や日本との関係について紹介します。

今月のテーマ

## 中央アジア・コーカサス地域

## Q1 日本にとって中央アジア・コーカサス*地域はどんな存在?

### A1 地政学的に重要な位置を占め、資源が豊富。歴史的にも日本と深いつながりがある重要な地域です。

中央アジア・コーカサス地域は、以下の三つの点から日本にとって重要な地域といえます。

一つ目はロシア、中国、中東、欧州に囲まれ、地政学的に重要な点です。開発協力を通して同地域が発展し安定することは、日本を含むユーラシア地域全体の安定・発展につながります。

二つ目は経済的な潜在力です。域内各国はいずれも1991年に旧ソ連から独立しました。石油、天然ガスなどの鉱物資源が豊富な国が多く、日本にとって資源の供給元となるだけでなく、日本が開発協力を行うことで地域の経済力が高まれば、貿易・投資の相手国として強い関係を築くことができます。

三つ目は、歴史的に日本とつながりが深く親日国が多い点です。シルクロードを通って仏教文化などさまざまなものが日本に伝来しましたが、これらの国々はアジアとヨーロッパをつなぐシルクロードの通過地域にあります。また第2次世界大戦後、この地域に抑留された日本人は厳しい環境下にあっても力を尽くして仕事をし、現在でも抑留者が建設した建造物が残っています。日本人の勤勉さが人々に感銘を与え、それが現在の親日感情の基盤になっている国もあります。

ODA(政府開発援助)は国益を追求するための重要な外交ツールであり、日本にとって重要な中央アジア・コーカサス地域の発展に貢献することで、この地域と日本との信頼関係、経済関係を強化しています。

＊ 中央アジア諸国にはカザフスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンが、コーカサス諸国にはアゼルバイジャン、ジョージア、アルメニアが含まれる。

## Q2 中央アジア・コーカサス地域での開発協力の柱は?

### A2 同地域の社会を安定させるために、市場経済の定着と経済発展を協力の柱に据えています。

日本は、中央アジア・コーカサス地域に対する開発協力の目標に「開かれ、安定し、自立した」発展への貢献を掲げています。同地域の社会が安定するために市場経済の定着と経済発展を協力の柱に据え、旧ソ連時代の老朽化した経済インフラの再構築、市場経済化のための人材育成、域内での協力の促進を進めています。

また、日本は域内各国との二国間協力に加え、地域全体に対する協力も行っています。中央アジアについては、同地域の安定と発展には各国共通の課題解決に向けた地域協力が不可欠との観点から、日本がその"触媒"となるべく、2004年に「中央アジア+日本」対話を立ち上げ、外相会合をはじめさまざまな形で対話を続けています。コーカサス地域については、18年に国づくりを担う人づくり支援および魅力あるコーカサスづくりのためのインフラ整備・ビジネス環境整備の二つの柱からなる「コーカサス・イニシアチブ」を発表し、協力を進めています。

2020年8月に行われた「中央アジア+日本」対話・外相テレビ会合では、新型コロナウイルス感染症対策での協力や、22年の外交関係樹立30周年を見据えた協力のあり方について意見交換が行われた(写真提供:外務省)。

答えてくれた人

外務省 国際協力局
国別開発協力第二課 上席専門官
**富岡久永**(とみおか・ひさなが)さん
1987年、外務省入省。ミャンマー、アメリカ合衆国、南部アジア部、領事局などを経て2020年から現職。



## Q3 具体的にはどんな協力を行っているの?

### A3 地域に共通する課題と各国のニーズ、それぞれに対応した協力を行っています。

中央アジア・コーカサス地域は、エネルギー資源の有無により一人当たりの国民総所得が1万ドル近い国と1,000ドル程度の国とがありますが、地域共通の課題も多く存在します。その解決に向けて老朽化したインフラの整備や市場経済化、持続的で安定した経済および社会発展のための国づくりへの協力などを実施しています。

旧ソ連時代の老朽化した経済インフラ整備協力として、発電所建設、道路建設、水道建設などを行っています。またバランスのよい社会発展に向け、保健・医療分野でも国際機関と連携した母子保健強化、安全で衛生的な飲料水へのアクセスを可能とするための給水改善計画などを実施しています。今般の新型コロナウイルス感染症の拡大をふまえ、中央アジア・コーカサス地域のほぼすべての国に対し、保健・医療関連機材の供与を行い、各国のコロナ対策に貢献しています。また、同地域の主要産業である農業分野についても、市場のニーズをふまえた農業の多角化支援、灌漑機材整備や貧困農民支援などを行っています。

一方で防災、気候変動対策、国境管理強化に関する協力などは、各国ごとのニーズに応じたきめ細かい協力を行っています。地震による被害が多いアルメニアやトルクメニスタンに対しては、技術協力による地すべり対策や地震モニタリングシステムの改善を実施。キルギスでは無償資金協力による雪崩(なだれ)対策、タジキスタンでは災害に強い道路管理での技術協力を行っています。環境分野では、旧ソ連時代の化学工場の廃液流出による河川の水銀被害が起きているカザフスタンに対し、技術協力による環境モニタリングを行っています。「21世紀最大の環境問題」といわれるアラル海の砂漠化とそれによる塩害が起きているウズベキスタンでは、国際機関と連携して保健サービスの改善や貧困改善対策などを行っています。アフガニスタンと国境を接する中央アジア地域の国に対し、国際機関と連携して国境管理強化や麻薬対策などの地域協力も行っています。

このように国と地域、それぞれに必要とされている協力を行うことで、日本と中央アジア・コーカサス地域のつながりを強くすることができるのです。

水が干上がって砂漠化したアラル海(MPHSTF for the Aral Sea Region in Uzbekistan 2019 Annual Fund Level Reportより転載)。

ウズベキスタンでの「カルシ-テルメズ鉄道電化事業」では、従来のディーゼル方式よりも牽引力の高い電気方式への改良にJICAが協力。急勾配の山岳地帯を走る鉄道の輸送能力の向上に協力した。

タジキスタンでJICAが実施した「道路災害管理能力向上プロジェクト」。春季の雪解け水による洪水や、地すべり・落石などの道路災害に対応できる行政・技術面での復旧体制の構築に協力した。

©DLE

# JICAイベントカレンダー 2021 FEBRUARY-MARCH

## JICA関西（オンライン）
## オンラインでつながる関西とウガンダ　2月18日（木）

泉佐野市訪問団がウガンダを訪問した際に受けた、歓迎セレモニーのダンスの様子。

**●JICA関西発リモートツアー 第3弾 ウガンダ×泉佐野市**
日時：2021年2月18日（木）18:30～20:30
会場：オンライン上（Zoom使用）
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA関西まで。
申し込み、詳細はこちら

ホストタウンとは、東京オリンピック・パラリンピック開催を契機に、日本の地方自治体が大会参加国や地域との交流を深める取り組みのこと。JICA関西では関西圏のホストタウンを盛り上げようと相手国を知るためのイベントを定期的に開催。今回は泉佐野市（大阪府）がホストタウンに登録しているウガンダに焦点をあてる。同国出身でICT技術を利用したシステム開発の研究を行う大学院生や、同国で活動をしていたJICA海外協力隊員から話を聞く。

## JICA関西（オンライン）
## コーヒーから知る中米の魅力　2月20日（土）

中米5か国（コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア）をテーマに国際協力入門セミナーを開催する。第1部では中米を専門とする大学教員から中米の政治や経済の話を聞く。第2部では現在、日本で中米のコーヒーの輸入販売事業を手掛けるJICA海外協力隊経験者3名によるパネルトークが行われる。

**●喫茶カリブ　～コーヒーから知る、中米の魅力～**
日時：2021年2月20日（土）13:00～15:10
会場：オンライン上（Zoom使用）
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA関西まで。
申し込み、詳細はこちら

## JICA北海道（帯広）（オンライン参加も可）
## 湿地について理解を深めよう　2月21日（日）

北海道で湿地の自然を守る団体「釧路国際ウェットランドセンター」と共同でイベントを開催する。釧路湿原ラムサール条約登録40周年記念講演をはじめ、イランの人たちによる湿地についての話や、国際協力の仕事に関する体験談、教員向けの国際理解教材活用のためのワークショップなどさまざまなプログラムを用意。会場ではパネルや民族衣装の展示のほか「湿地のいきものをクラフトで作ろう」展も同時開催する。

2019年のイベントの様子。

**●Go To ウェットランド！ 湿地のいきものは地球の家族 ラムサール条約登録40周年記念「世界の人々と湿地について話そう」**
日時：2021年2月21日（日）10:00～17:00
会場：釧路市中央図書館
（多目的ホール、学習室1、学習室2）
北海道釧路市北大通10-2-1
または、オンライン上（Zoom使用）
参加費無料、展示ブース以外は要事前申し込み。
詳細はJICA北海道（帯広）まで。
申し込み、詳細はこちら

## JICA東京（オンライン）
## JICA海外協力隊の活動を知ろう　2月20日（土）、3月13日（土）

**●JICA東京オンラインセミナー ～シリーズ世界に挑むJICA海外協力隊～**
日時：2021年2月20日（土）10:00～12:30
3月13日（土）14:30～17:00
会場：オンライン上（Zoom使用）
参加費無料、要事前申し込み。
詳細はJICA東京まで。
申し込み、詳細はこちら

JICA東京では、定期的にJICA海外協力隊を知ってもらうためのオンラインイベントを開催している。さまざまな職種や国で活動したJICA海外協力隊経験者が登壇し、経験談とその後の活動についてパネルディスカッションを行う。2月20日は公共・公益事業、3月13日は食と環境がテーマで、個別相談や質問も可能だ。

ホンジュラスの学校で健康講座を行う隊員。



## 本の新着情報

読者プレゼント 詳細はp.38へ

### 『子どもの権利ってなあに？』

1989年に国連で「子どもの権利条約」が採択された。条約は、水や食べ物、家、教育、医療を受ける権利、子どもにとって危険で有害な行動から守られる権利、家族や地域、文化的な生活の一員として認められる権利など、54の条文で構成されている。本書は、このような権利を子どもにもわかりやすい言葉で説明した絵本。国や性別などに関係なく、すべての子どもたちが持つ権利を色鮮やかなイラストとともに伝える。

**●『子どもの権利ってなあに？』**
アラン・セール 文、オレリア・フロンティ 絵、福井昌子 訳、反差別国際運動（IMADR）監訳／解放出版社
2,750円（税込み）

### 『外国にルーツを持つ女性たち 彼女たちの「こころの声」を聴こう！』

日本には約300万人の“外国にルーツを持つ人”が暮らしている。本書は、そのなかでも地域で暮らす外国人女性に焦点をあて、著者が日本語学習会や国際交流協会で出会った人たちの声をまとめたもの。日本人男性と結婚した女性や、日系ブラジル人やペルー人ほか、文化や言葉の壁などさまざまな問題を乗り越えて地域社会の一員として活躍している女性たちから、多文化共生社会のリアルな姿が見えてくる。

**●『外国にルーツを持つ女性たち 彼女たちの「こころの声」を聴こう！』**
嶋田和子 著／ココ出版
1,980円（税込み）

読者プレゼント 詳細はp.38へ

読者プレゼント 詳細はp.38へ

### 『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん』

アフガニスタンで支援活動をしていた医師の中村哲さんが銃弾に倒れてから1年――本書はその功績を後世に伝えるために現地で刊行された絵本の日本語版だ。アフガニスタンでの活動をもとに書かれた「カカ・ムラド」と、中村さんが登場する童話「カカ・ムラドと魔法の小箱」の2作を1冊にまとめたもの。用水路建設や医療活動を続けてきた中村さんの考えや、アフガニスタンの人々の思いが詰まっている。

**●『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん』**
ガフワラ 原著、さだまさし ほか訳・文／双葉社
1,650円（税込み）

## 映画の新着情報

### 『ある人質 生還までの398日』

けがのために体操選手の道を断念したダニエルは、夢だった写真家に転身。戦下の日常を撮影するため、シリアの非戦闘地域を訪れる。しかし現地の情勢が変わり、彼は突然過激派組織IS（イスラム国）に誘拐され、家族にも巨額の身代金が請求されることになる――。奇跡的に生還するまでの398日間を追った実話には、家族愛と人間の尊厳について考えさせられる。

© TOOLBOX FILM / FILM I VÄST / CINENIC FILM / HUMMELFILM 2019

**●『ある人質 生還までの398日』**
2019年／デンマーク、スウェーデン、ノルウェー／138分
監督：ニールス・アルデン・オプレヴ、アナス・W・ベアテルセン
配給：ハピネット
詳細はこちら
2月19日より、ヒューマントラストシネマ渋谷、角川シネマ有楽町ほか全国で公開。

＊新型コロナウイルスの影響により、イベントの中止や変更、映画の公開延期等の可能性があります。事前に公式サイトなどをご確認ください。

## 読者の声

### 11月号「新時代の人間の安全保障 すべての人に安全と尊厳を」を読んで

プロローグの星野俊也さん同様、私も亡き緒方貞子さんのことを思い起こしていました。今回の特集で取り上げていたベトナムやガーナだけでなく、さまざまな地域で緒方さんのキーワード（ポリシー）がJICAを通じて、確かな成果を上げはじめていることを実感しました。
（香川県／60代）

ベトナムで新型コロナウイルスの感染拡大防止に成功していると聞きましたが、これもJICAの支援があってこそのものとわかりました。コロナが終息してベトナムをはじめ途上国での活動が再開できることを祈っています。
（福島県／30代）

### 12月号「中東のいま　『アラブの春』から10年」を読んで

今回の特集はとても興味深く読みました。私はJOCV（青年海外協力隊）のOVで、現在は留学生に関係した仕事に就いているので、シリア難民を留学生として日本に受け入れることができないかと考えるきっかけになりました。
（京都府／40代）

池上彰さんのお話からはいつも中東への深い愛情を感じます。私もステレオタイプで物事をみないようにしようと思いました。
（大分県／30代）

チュニジアでは教育に力が入れられてきたことが民主化移行に成功した理由だということに、あらためて教育の重要性を感じました。現在のコロナ禍で、世界中で学校の休校など教育が提供されていない問題が生じています。ICT教育が進み、すべての子どもたちに教育が届くことを望みます。
（三重県／30代）

## 《アンケートのお願い》 プレゼント付き

JICAや記事内容についてのご意見、ご感想をお待ちしております。また、こんな企画を実施してほしいなどのご希望もぜひお寄せください。お寄せくださった方の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。下記項目をお書き添えのうえ、巻末のアンケートはがき、Eメール、またはファクスでお送りください。

●氏名　●住所　●電話番号　●年齢　●性別（自由回答）　●職業　●本誌を入手した場所　●面白かった記事　●本誌へのご意見・ご感想　●JICAへのご意見・ご質問　●ご希望のプレゼント番号

＊お寄せくださったご意見・ご感想は、本誌やJICAのウェブサイトに転載する場合があります。あらかじめご了承ください。ご記入いただいた個人情報は、プレゼントの発送および誌面の向上に役立てること以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

**◎応募締め切り 2021年3月15日**

## ［2021年2月号のプレゼント］

①
**書籍**
**『子どもの権利ってなあに?』**
アラン・セール文、
オレリア・フロンティ絵、福井昌子 訳
反差別国際運動（IMADR）監訳／
解放出版社
1名さま

②
**書籍**
**『外国にルーツを持つ女性たち 彼女たちの「こころの声」を聴こう!』**
嶋田和子 著／ココ出版
1名さま

③
**書籍**
**『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん』**
ガフワラ 原著、
さだまさし ほか著・文／
双葉社
1名さま


# mundi

FEBRUARY 2021 No.89
編集・発行：独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency（JICA）
〒102-8012　東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
Eメール：ML_JICAPR@jica.go.jp
URL：https://www.jica.go.jp/

制作協力：株式会社 木楽舎
〒104-0044　東京都中央区明石町11-15
ミキジ明石町ビル6F『mundi』編集部
TEL：03-3524-9572　Eメール：ML_JICAPR@jica.go.jp



●アンケートの送付、定期送本、バックナンバーの取り寄せに関するお問い合わせは木楽舎までお寄せください。
●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

**定期送本のご案内**

**●申し込み方法**

巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送本期間・送付開始月号を明記のうえ、所定の金額（送料＋手数料）を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送の手配をいたします。入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください。

＊複数冊、またはバックナンバーをご希望の場合は送料が異なりますので『mundi』編集部（木楽舎）までお問い合わせください。

**次号予告（2021年3月1日発行予定）**

## 3月号 特集 地球ギャラリー

写真とエッセイで世界のさまざまな現実を伝える、本誌の人気連載ページ「地球ギャラリー」。過去の記事をピックアップし、写真家が現地への思いや、当時の撮影エピソードなどをふり返ります。

**『mundi』バックナンバーはJICAのウェブサイトでもご覧になれます。**

JICA mundi　検索　https://www.jica.go.jp/publication/mundi

# 日本初の「責任ある外国人労働者受入れプラットフォーム」を設立

2020年11月、JICAと一般社団法人ザ・グローバル・アライアンス・フォー・サスティナブル・サプライチェーン（ASSC）が共同で事務局となり「責任ある外国人労働者受入れプラットフォーム」を設立した。

外国人労働者をめぐる人権・労働問題が国内外で指摘されているなか、このプラットフォームは、外国人労働者を適正に受け入れ、「世界の労働者から信頼され、選ばれる日本」となり、豊かで持続的な社会の実現を目指すもの。具体的には、①外国人労働者とのコミュニケーション強化、②外国人労働者受け入れにおける諸課題の分析・解決策の検討、③日本国内・国際社会への情報発信等を行う予定だ。

さまざまな分野にわたる関係者が会員として名を連ねており、20年11月16日に開催された設立総会では参議院議員の片山さつきさんやジャーナリストの池上彰さんも登壇。外国人労働者をめぐる課題の深刻さと、プラットフォームへの期待を語った。

主催者あいさつでプラットフォームの重要性を語った北岡伸一JICA理事長。

## ニュース深掘り！ 日本で働く外国人との懸け橋となる

総人口の減少・少子高齢化が日本の社会経済にもたらす影響は深刻で、外国人労働者の受け入れは必要不可欠です。しかし、他国でも類似の課題を抱えており、国際的な人材獲得競争はすでに始まっています。将来にわたって〝選ばれる日本〟となるためには今が正念場です。

外国人労働者の半数以上が途上国の出身であるなか、JICAは途上国を中心に国内外に数多くの拠点とネットワークを持っており、日本国内への外国人労働者の受け入れや共生社会の構築に向けてさまざまな貢献ができると考えています。改正入管法の成立をふまえ、組織を挙げて貢献策の検討を加速させた結果、このプラットフォームの構想が生まれました。

このプラットフォームの特徴の一つは、外国人労働者の〝声〟を直接聞くことです。外国人労働者が抱える課題を正確に把握し、関係者が協働して課題解決に向けた取り組みを進めていく予定です。時間はかかるかもしれませんが、一人ひとりが気づき、理解し、行動していくことが大切だと思います。

JICAは「信頼で世界をつなぐ」をビジョンに掲げて国際協力に取り組んでいます。そのフィールドが途上国であれ日本であれ、おたがいを尊重し支え合う社会の実現を目指していきたいと思います。

JICA企画部
総合企画課
**木村明広**さん
きむら・あきひろ

2010年JICA入構。調達部、産業開発・公共政策部、インド事務所を経て18年から現職。外国人材の受け入れや共生社会の構築に向けた方針の検討などを担当。

## JICA HEADLINE NEWS

**1月 12日** ▶ **インド 新型コロナウイルス危機対応のための融資契約に調印**
財政支援を通じ、新型コロナウイルスによる貧困・脆弱層への影響を抑制・緩和する。

**1月 8日** ▶ **カーボベルデ 再生可能エネルギー発電を支援**
再生可能エネルギー発電の適切な導入促進策と運用方法を確立し、ディーゼル発電の運用・維持管理に関する体制を強化するためのプロジェクトを実施。

**1月 5日** ▶ **ミャンマー 水道事業の運営能力改善に協力**
手洗い等の新型コロナウイルス対策にも不可欠な上水道サービス改善に貢献するプロジェクトを実施。

◀◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス！
https://www.jica.go.jp/information/index.html

mundi
2021 February No.89
[ムンディ] 令和3年2月1日発行(毎月1回1日発行) 編集・発行:独立行政法人 国際協力機構
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル FAX:03-5226-6396 https://www.jica.go.jp/
ISSN 2188-0670

わたしが見つけた SDGs Vol.29

1.貧困をなくそう
8.働きがいも経済成長も

工房の女性たちと坂本さん(前列右から3番目)。ともにものづくりに励んでいる。

# アフリカのエネルギーを、ビーズに乗せて

「早く私にも見せて!」。工房中で回覧したのは日本の女性たちがアクセサリーを身にまとった写真だ。それは工房で働く女性たちの大きな喜びとなった。私は赤道直下ケニアの土を原料とした陶器アクセサリーをケニアのシングルマザーたちと製作している。アフリカらしさを生かした魅力ある製品を日本に届け、手にした人の満足とその先にある生産者の継続雇用を目的とした事業だ。活動のきっかけは、国際協力の仕事がしたいと向かったケニアで感じた自分の無力さだった。助けられているのは私ではないだろうか。物質的に貧しいながら日々エネルギッシュに生きるケニアの人々の姿が心に響いた。私が今できることは何か。模索するなかで、縁あって雇用創出を目的とした工房に出合った。手仕事から生み出されるアクセサリーには彼女たちの大らかさ、エネルギッシュさが詰まっていて魅了された。日本市場で販売するには品質など細かい部分を整える必要があった。継続雇用が可能となるための適切な利益を確保できるデザイン・品質、そして製品価値を正しく伝えるブランディングが必要と考え製作に努めている。その大きな原動力は、明るい未来を信じる職人たちとの信頼関係、そして製品を手にした人たちからもらう喜びの声だ。一歩ずつだが必ず努力が実ると信じて、みんなで協力し活動している。

今月の投稿(文と写真)坂本厚子さん
2003年に単身ケニアに留学し、スワヒリ語を学ぶ。のち国際協力機関の仕事に従事。3年間のケニア生活を経て13年にオンラインショップ「Chui(チューイ)」を立ち上げ、アクセサリーを通していそがしい日本の女性には元気を届け、現地の女性には雇用サポートを行うことで、双方の女性をハッピーにすることに挑戦中。

## あなたの投稿をお待ちしています!

「わたしが見つけたSDGs」に写真と文章をお寄せください。貧困や気候変動、格差ほか、いま世界が直面している課題やその解決に向けた取り組みのエピソードなど、SDGsの17の目標を身近に感じられる作品をお寄せください。
応募要項:写真1点(ご自身が撮影されたもの)、文字原稿400字以内。
＊写真内の被写体に関する肖像権およびその他の権利は、投稿者の責任において被写体や権利保持者の承諾を得るなど必要な措置をとったうえでご応募ください。

ご応募・お問い合わせ先▶ML_JICAPR@jica.go.jp(『mundi』編集部宛て)

## SDGsとは

持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)は「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。

持続可能な開発目標(SDGs)とJICAの取り組み

独立行政法人 国際協力機構